
EIN GLANZ

きはねせりな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

EIN GLANZ

【EZコード】

N6003N

【作者名】

きはねせりな

【あらすじ】

EIN GLANZ第一部ハイライト版です。おまけ程度に第一部と第二部の冒頭あらすじがつきます。

写本B版

第1部 序章

不思議な夢をみた…

愛する娘のこと

庭の中でエーデルワイスの花を愛でる娘の幼なじみのアルベル君

妻のテレーゼと養子のコリアン

虹色の雪がグリーンアイスのような光彩を残してゆく…

「リーザ」とアルベル君が優しく呼びかける

我が夢……

皇帝ヨリウス27世ハインリヒは人払いした執務室で目を覚ました。夢は甘美で現実の過酷さを和らげたが何を暗示していたかはわからなかつた。

また、そのようなことにかまけている場合でもなかつた。

机の上の書類に金印を押すと宫廷医をたばねるフォーデルバイデ侯に親書を手渡すべく階段を降りていく。

起立してフォーデルバイデ侯の前に立つ武官に挨拶をすると、奥の部屋に待機していた壯年の侯爵が立ち上がる。

「おはよウジヤエコササハ皇帝陛下

「侯爵、」の親書をサハトニア王ラルスに渡して欲しい。
くれぐれも内密に頼む」

「恐まりました。本当にこれでよいのですね？」

「……娘には安全な生活を与えてやりたい。

そのためならば、だ。」

「心得ました。しかし天帝猊下にはどう」説明致しましょう。
王子として育てるようたまわれておいででしょう

「……国外に逃がすまでの偽装にはなるだろ？。

気が進まないが致し方ないだろ？……」

ハインリヒがフォーテルバイデ侯の田を見る。

「ではわたくしから猊下に」説明致します。

陛下はどうかこれ以上ご心配されぬよう

「孫を娘にしたと知れば激怒されよう。

私の…双子の方の息子もいまだ見つからないからな。

「陛下、これはご賢明な決断だと思います。

どちらかの性にしておかねば殿下がおかわいそうです。

セドリク殿下が第三の性でお産まれになつたので、猊下は天使だと
お喜びになられた。

ですが、将来、成長が身体に負担をかけます。

殿下の健やかなご成長こそがわたくしの望み、

一族ろうとう祖国のために身を捧げる所存でござります」

「選帝侯のそなたにとつては負担であるつ」…世話をかけるがよろしく頼む

皇帝ヨリウス27世ハインリヒが頭を下げた。

「動乱はノルトラント王の機転でおさまりつつあります。

陛下にも君主らしくしていただきねばなりません。

皇帝陛下自ら頭を下げるなど今後はなさいませんよ！」

「…………そ、うか。まだ慣れぬのだ。まさか私が皇帝に選出されよう

とは一〇年前ならば考えもしなかつたことだ」

「陛下ならばと先代ヴィルヘルム様も後のことを任せられたのです。
しっかりなさいませ！」

「たとえ挫けそれでも、娘の幸せな未来のためならば私は頑張ることができるのだ。

病床の父に代わり私が築いて見せよ！」

「共和制再建！」

フォーデルバイデ侯は秘密の合い言葉で応えた。

新しい皇帝ヨリウス27世の子は双子で産まれた。

最初に産まれたのが兄のレオンで、一緒にセドリク・エリーザベト・
ギーゼルヘル皇太子も産まってきた。

一番目の子供セドリクは第三の性で産まれた為、宫廷医長であるフ
ォーデルバイデ侯は

どちらかの性別に決めるようにハインリヒに提案したのだった。

ハインリヒは思案の末、妻の父である天帝カリクトゥスの意向にそ
わない結果なのだが、
女の子とすることにしたが、

カリクトゥスの『皇太子として育てるより』といついついつけは向
こうへ5年間守ることになった。

何故第一子が皇太子なのは、エーデルラントの動乱期に第一子レオンがさらわれてしまったことが大きかった。

第一子レオンは後に帝国の一領邦ノルトラント王国の鉄拳大公が單獨で救い出したものの、

彼は機転をきかせてノルトラントの古い修道院に赴き修道院長にこの子を預けた。

皇帝ユリウス27世、彼はハインリヒと呼んでいたが、
彼はハインリヒの異母妹エルヴィラ（ルーヴィル大公妃）がその修道院を訪れるることを知っていた。

彼は子供の産めない身体の大公妃にレオンを育てるようにもちかけた。

無論、その子の安全の為に事実は伏せられたのだが、

エルヴィイラは修道院が帝室の誘拐事件を忘れないようにとレオンハルトと名付けた。

エルヴィイラはよく異母兄のハインリヒのもとを訪ねたので、セドリクとレオンは兄弟のように育つた。

二人は何をするのも一緒にセドリクが字を教えた後、レオンハルトは木の登り方を教えた。

帝国の情勢は非常に不安定だったが、ハインリヒは家族サービスに努め、セドリク・エリーザベトは何不自由ない幼少時代を過ごせた。

彼女が皇太子として育てられて数年がたつと、この国をよく統治し

たハインリヒは、妻テレーゼにこう告げた。

「養子を迎える。我が子に万ーの時はその子を後継者として迎えるつもりだ。」

テレーゼは迷いながらも夫の決断を支えた。

「お兄さんになつたときって嬉しい？」

セドリクが不安げに友達の前でみんなに聞いた。

「どうしたの？」

自由都市リーブルヴィルの盟主の子アルベルがオルガンを弾く手を止めてセドリクに聞いた。

「わたし、お兄さんになるみたい…」

「それはおめでたいとおもうのだけど…嬉しくないみたいな顔をしてるじゃない」

「うん…」

セドリクの顔は曇つたままだった。

アルベルは心配げにこう話しかける。

「ボクはお母様が死んじつたから兄弟はないけど、かわりに従兄弟が兄弟みたいに想つてくれている。

でも従兄のアンスは歳が近いから、君のいう歳の離れた兄弟とのとは少し違うかな？

「うん…でもね。リーザ（セドリクの愛称）はみんなに優しいから、きっとといお兄さんになると想うよ…」

だけどセドリクの顔は曇つたままだ。

セドリクは兄と弟両方いる母方の従兄のラインハルト王子に尋ねた。

「お兄さんになるつてどんな感じ？」

「ああ？」

嬉しいが何だらうな。お前の場合は、やはりあれだな。
叔父上はお前の弟の方を後継者にしたいんじゃないかな？」

「やつぱり…」

セドリクの顔がますます曇った。

「ちょっとライン…」

従兄（本当は実の兄）のレオンが横から会話に加わった。

「何だ？」

「彼女は君を慕ってるんだよ。もっと親身に答えてあげなよ」

「うむ…。オレも兄をなくしたが弟といつもの hadn't.
基本は子分だから…オレの家の場合を話しても参考にはならんぞ？」
レオンに向かつてラインが言つた。

「弟の方が完璧な男の子で産まればきたら僕はかなわないな…」
セドリクが泣きそうになつた。

「おいおい泣くなよな。男なら辛くとも堪えろよな。」

新しいノルトラント大公の息子アンセイエス・アンセルムス・ファレンティーン…通称アンスがセドリクの肩を叩いた。

「大丈夫だよ。アンス、僕は大丈夫だ。」

「泣きたかつたら泣いてもいいんですよ？」
笑いながらラインは言つた。

「リーザ…僕は君を弟のように想つているよ
レオンがセドリクを慰めるように言つた。

「本当に？」

セドリクの顔が明るくなつた。

「お兄さんになれて嬉しい？」

「そりゃ君のお兄さんみたいなものだもの。嬉しいに決まつてるじゃないか～」

レオンは照れくさそうにセドリクの肩をバシバシ叩きながら言った。言い切つた。

「へえー。へえー。僕もレオンみたいなお兄さんになれるように頑張つてみるよ。

だつて弟つて言われて嬉しいもの。

きっと僕の弟も嬉しいと想つ

「レオンさんはうまいなあ」

レオンに拍手を送りながらアルベルが笑つて言つた。

「やつぱりリー・ザはそうでなくちや。

ボクも君の弟に早く会つてみたいよ！」

尊敬している父親を弟にとられたよう」「口ねでいるダメなひとにみえたセドリクだったが、

気持ちの切り替えが早いのがセドリクの良いところでもあつた。

このようにセドリクは友達にも恵まれていて、早く尊敬する父親の役に立てるように日々頑張つて生きていた。

それが武術であつたり馬術であつたり政治であつたりしたのだが、当のハインリヒは娘には文学少女のようにしとやかで心優しい子供に育てたかったこともあり、

そのおてんばぶりには少々困惑していたのだが…

それはある日、セドリクが父のもとを訪ね、士官学校に通いたいといつところで衝突した。

セドリクが士官学校に通いたいと言いく出すので、ハインリヒは持っていた本を床に落とした。

今まで娘はいつたい私のどこを見ていたのか。

セドリクは軍人を市民の代表のように考えていて、

政治を志す者として軍務に就いておきたいと大剣を胸に抱えて熱っぽく言つた。

そういうことは將軍達に任せて、もつと世の中を見てみなさないと
ハインリヒが諭すと、
「ですが皇帝陛下のお役に立てます」といつて聞かない。

ハインリヒは士官学校に通うのは、いくら優秀だからとはいえ、年齢的にはまだ早すぎると明確に反対したので、セドリクは祖父の後ろ盾を借りることにした。

天帝と呼ばれるカリクトゥス教皇は孫のセドリクが言ひ進路を歓迎して騎士修道士になるように言つたのでセドリクもこれにならつた。

皇帝はセドリクをほめちぎる天帝に反論できず、呆れてしまつた。

セドリクが士官学校に通つといつのでレオンとアンスも一緒に行つてはどうかという話になつた。

正直、子供一人ではさみしからうとアンスの祖父で隠居した鉄拳大公が持ちかけたからだ。

飛び級した子ども達はお兄さんに混じつて和やかに学ぶことになつ

た。

お兄さん達にお世話をねてばっかりなのではないかと思つて、

おかげで3人は良い環境でよく学び、よく遊んだ。

そうしてセドリクが14歳になると任官して王宮付けの騎士になつた。

セドリクにとっては夢の第一歩を踏み出したよつて見えた。

「平和だな。良いことです」

セドリクは城から見える荒涼たる山々を見ながら紅茶を口に含んだ。

「今日のケーキが出来ましたよ」

とアルベルがベリーのミルフィーユを持つてくれる。

アルベルも兵役で軍楽隊に所属していて夜勤明けのセドリクとお茶の時間を過ごすことが定番になり、

毎日嬉しそうにケーキを作ったり、お茶を淹れたりしていた。

「でも……こつになつたら皇帝陛下のお役に立てれるのだろう?」

「自分の力だけで頑張っているものね。

限界があるんじゃない?」

アルベルはふと思つた。

セドリクの仕事内容は河川や城のある湖が氾濫した時は川に行って復旧作業に従事したり、冬は除雪作業、

それと土木作業が多くて、この地域に密着した活動が多くつた。

政権は不安定だが、対外的に戦争もなく非常に平和なので、演習以外で軍功をあげることもない。

「そりいえば、近衛隊の面接があつたけど、どうだったの?」

面接があつたのを思い出したアルベルがセドリクに尋ねた。

「…面接は不採用だったよ」

「やつぱつ……わざと遠ざけているんじや……」

つかぬことをおきおきました。

「わざと？」

「だつて、陛下は殿下が軍人になるのをずっと反対していたもの。ちよつとパパに聞いてみるよ。といつてもパパは『先祖様と違つて将軍でも軍人でもないけど……』

「宮廷音楽家だろう。君の父上は「

でもね。とアルベルは付け加える。

陛下にお仕えしていることにはかわりはないし、『先祖様は將軍や古くは皇帝も輩出しているのだから

何かしら情報やコネクションを持つているんじやないかと思つてとセドリクの耳元で囁いた。

「君の家柄はとても古いから確かに貴重な意見をいただけるかもしれないね」

とセドリクはたまにはアルベルを頼つてみることにした。

「ボクのパパもたまには役に立つてところを見せてあげるよ」「アルベルは張り切つていたがアルベルの父で伯爵のピエールはそつけなく

そんなものないと答えた。

「え？！

何があるでしょ？」

「いつたいどれだけ昔の話だと思つていてるんだ……？」

ご先祖様が皇帝だったのは古代の話だぞ…

確かに我がヘルムホルト家は將軍の家として北エーテルラントと南エーテルラントと

自由都市であるリーブルヴィル自治区を守護した家柄としては名高いが

私はしがない音楽家だし…」

ピエールは上着を取つて湖に釣りに出掛けてしまった。

セドリクは役に立てなくて「じめんよと申し訳なさやつに縮こまるア
ルベルに気にしないように言った。

「やはりそんなに甘くはないということだよ」

そんなセドリクの声をよそにアルベルの落ち込みよつは大変深いものだった。

そんな頃、皇帝ヨリウス27世ハインリヒのもとに初老の將軍が訪れた。

「セドリク様も将来が楽しみですね。

陛下の片腕として働く日も近いでしょう」

ヨリウス27世ハインリヒは將軍の褒め言葉にも表情を変えず淡々としていて、愚痴を言い始めた。

「私はあれが軍人になるのには賛成していないのだよ。

おとなしく將軍達に護られていればいいものを、何か無理を言わないかとヒヤヒヤしているよ」

これはこれはといった大仰なジェスチャーをすると

「そうですかな?

私にはお父上想いの少年に見えましたが、

陛下におかれましては、思つところが御座いましょう

「はあ…」

皇帝コリウスのため息は海より深かつた。

セドリクが面接に行くので一緒に面接を受けた少年がいた。
レオンである。

実の父ハインリヒが悩んだだけ通知が遅れたが、彼は見事合格した。
頬杖をかけてるセドリクの前でレオンは言った。

「何か探つてみるよ。それと君を守ることになったからよろしく殿
下」

その話は北の大公ノルトラントの鉄拳大公（彼は隠居しているが）
の耳にはいると、

彼は自国の近衛隊にセドリクを招いて知識と実践を授けるように手
配した。

こうして双子はそれぞれ自衛の為の知識と技術を学ぶことが出来た。

いつも隠居したノルトラントの大公に気を遣わせていると知ると皇帝ユリウス27世ハインリヒは自らを恥じるばかりであつたといつ。
「伯父上までセドリクを甘やかせすぎだ。

セドリクのわがままにつきあつていないので放つておけばいいと思う
フォーデルバイデ侯のもとで医学を学んでいたラインはそう言つと
セドリクをきつく見据えた。

「それだけど、お父上を余程尊敬していないとなれないと思つよ？」
フォーデルバイデ侯の孫で自身も医師のルプレヒトがラインに話し
かけた。

「お互い尊敬できる家族が欲しいものだな」

「君の所はお祖父様が厳しいからそれは大変だつとは思つよ。
何か困つてはいなかい？私は困りどおしだよ」

肩まで伸びる茶色い髪を後ろで束ね結いながらルプレヒトは困つて

いた。

どうしたんだとラインが尋ねると少し躊躇つたのだが、立派な装丁のついた書類ケースを本棚から出した。

「君のお祖父様、セドリク様を将来何にならせたいのだろう?」
まずルフレヒトは氣になっていたことを尋ねることからはじめた。

「何つて、聖職者になるようこと言つているな

ラインが退屈そうな返事をしたらルフレヒトは「ああ、やっぱり」と相槌をうつて、しばらく考えると、

「私も今の内に身の振り方を考えておいた方が良さそうだ」と優しげに笑つた。

表情は優美なのだが、すぐに眉間にしわをよせると

「私たち医師にはセドリク様のお身体の事を理解できても、民衆には簡単に理解できないと思つ。

皇太子が本当は皇女だと知つたらなおのこと簡単には受け入れないだろう」

ルフレヒトがまじめな表情で話し出すので、ラインは「障害をもつているのだから仕方ないのではないか」と
言ってみた。

「君やファレンティーン王子アンスには民衆からの支持があるから心配していないけどね。」

セドリク様は大貴族や各国の王様の寵愛があるけど、その反面

君らのように民衆から慕われているわけではない。

もちろん、セドリク様は民衆の為に死んでおられると思つよ。でも基盤が驚くほど脆いんだ。陛下もこれに特別な配慮はされていないみたいだから…」

「まだセドリクは子供だろ?」

「確かに今はあいつの夢…父親の片腕とまではいかないな。」

「そう心配せぬとも今からでも間に合ひうと思つがな」
ラインは鷹揚に構えていたのだが、ループレビトは書類の紐をといて
田の前にいる親友にそれを見せた。

「これは？」

「私のお祖父様から預かつたものなのだけど、セドリク様に関する
文書と手紙と…それから…」

「ああ、例の手術の時のカルテか」

書類の中から一枚のカルテを見つけてひょいとつまんだ。

「これといって特別なことは書かれていらないな」

ラインはカルテを読むとテーブルの上に戻した。

「「」ちゅらはどう?」

ループレビトがそういうて差し出した書類に田を通しながらラインは
尋ねた。

「国外にセドリクを逃がすための書類みたいだが…
昔は政情不安だったみたいだからその時のものみたいだな。
でもどうしてこれをオレに見せる?」

「「」の国に行く末が心配なんだ。

陛下はセドリク様を時期が来たら国外に出すつもりみたいだし…
ますます民衆の目には希薄にうつるんじゃないかな。

今は河川の復旧作業とか、割と地域に密着している活動をしている
けど、

流動的というか、セドリク様は今のお仕事をステップのひとつみた
いに考えてるふしもあるからね…」

国外へ今頃出しちびつあるつもつだらうか。
旅行でもさせる氣か叔父上は

「」

ラインが疑問を口にした。

「セドリク様を後継者にするのではなくて弟のコリアン・フード
リヒ様を後継に考えておいでよつだよ」

「コリアンを…？」

ルプレヒトが書類を渡すので、今持っている書類をテーブルの上に
置いてから、紙を持った。

「コリアンを後継者にな…」

「姉弟で帝位や王位をめぐつて争わないか心配だよ」

「どうだらうな。

セドリクは父親の顔に泥を塗るのを避けているから、あまり深くは
考えたことがなかつたがな。

コリアンの方は幼すぎて何とも言えないといつのが正直な意見な
だが…」

いつしかルプレヒトは涙ぐんで心のうちを語りつと口を開いた。

「いつか隠しきれなくなつて、セドリク様が女性だとバレてしまつ
日が必ずくる…」

それにはラインは何も言えなかつた。

ラインとループレヒトの2人が国をうれいていた。じる。

ローゼルツ帝国より海を越えて東の大陸は影大洋諸国と呼ばれていて、

海軍の国フイロソフィアでは政変が起こっていた。

バールバラ伯爵領にあるハワード邸の庭はエデンの園を彷彿とさせらるほど美しく、また池には錦鯉が悠々と泳ぐなど遙か東方の空氣もあつた。

800年続く伯爵家ハワードの当主アーサーは薔薇の手入れをしていて、

異母弟のヘンリがこちぢりに歩いてくる姿を見つけると手を振った。

異母弟ヘンリは会うなりこいつ言った。

「王制も倒れた。

オレは海軍に入つて、兄貴をかげながら支える。

これが兄貴の為だ」

伯爵アーサーは驚いて異母弟ヘンリを引き止めた。

「私の為？

私はお前を失いたくない。

何もこんな時世に軍人にならなくとも…」

そう言つてひきとめたのだが、ヘンリは言つだけ言つとせつたとバスに乗つて行つてしまつ。

アーサーも急いで後を追つた。

ヘンリが家出した翌日、「アーサーの母マティルダ王女は将軍からこの話を聞いた。

「ハワード家にも困ったものですね。

アーサーに気をつけようと言ひなさい」

マティルダ王女はアーサーの父と離婚していく、再婚相手の連れ子のヘンリが苦手だった。

しかもアーサーの父エリオットとヘンリの母は事故で他界したばかりで、アーサーの祖父はこの国の王なのだが、会談に赴いた所をアルメリアという軍事国家の独裁者に捕らわれてしまい、救出作戦が繰り広げられるものの未だ成功していないので、マティルダの頭痛の種は増えるばかりであった。

救出作戦には子供の頃、潮干がりに来ていた王に拾われた特殊部隊の士官スティブルストン中尉が加わっていて、將軍はマティルダ王女に面会した後、彼を呼んだ。

スティブルストン中尉は子供の頃から世話になつている老將軍に敬礼すると、
将軍が何故自分を呼んだのかを聞かされた。

「君には、士官候補生ばかりなのだが、その若い部隊を指揮して光大洋諸国へ渡つてもうつことになつた」

「閣下、しかしフィールドバリアがあるので渡れなかつたのではあ

りませんか？」

「そのために新型潜水艦を配備した。

後は軍港から艦長の指示に従ってくれ」

「今回は偵察任務ということになりましたのですか？」

「そうなるだろ？ 健闘を祈る」

「心得ました」

「うじてステイブルストン中尉は任務についてことになった。

ステイブルストン中尉はすぐさま軍港に向かつと艦長に面会した。
士官候補生のリストが予定より少し変わったということ。

彼らが来るまで待つていてほしいと言わされて1ヶ月も軍港に滞在することになった。

予定がどこかで狂つたみたいだとステイブルストン中尉は下士官にもらした。

1ヶ月を過ぎてから士官候補生達が軍港にやつてきたので、出航することなどがようやくできたのだが、

彼は育ての親（アーサーの祖父）が心配で仕方がなかつた。
主君の無事を願つて国を後にした。

そんなことがあつたとは知るはずもない光大洋諸国はローゼルツの帝都ローゼンでテレーゼ皇后は夫ヨリウス27世ハインリヒを慰めていた。

「子供の考えている」とは訳が分からん……」

ハインリヒがそう嘆くので、テレーゼは夫の頭を撫でて「リーザのことですか？」

と言った。

「リーザでもセドリクでも一緒にことだが、コリアンのことで失敗するわけにはいかないし……何やら迷っている様子なので、テレーゼは娘のセドリクを褒めてみることにした。

「文武両道だなんて凄いじゃない」

「しかし、利発すぎて手に負えないのだよ」

「知能指数が高いのね。
誰に似たのかしら」

「軍人になるなんて危ないことこの上ない。
もし大きな怪我でもしたらどうするつもりなんだろう……」

「心配しなくてもあの子は優秀ですから乗り越えますよ」

「……お前はいつも私のそばで慰めてくれるな。
助けられてばかりだ」

テレーゼはにこやかに微笑んでいた。

そんな夫の心配事も氣にとめてテレーザはセドリクを呼んだ。

「お母さま！」機嫌いかがですか？」

セドリクは楽しそうに母テレーザに挨拶して母の部屋に入った。

「あなたが楽しそうだから、私も楽しいわリーザ。
仕事は大変じゃない？」

「こりんなひととに助けてもらってるのですから何も苦痛はありません」

母を心配せることセドリクは背伸びをした。

「それなら良いのだけど、あなたは女の子だから、あまり無理をしてはいけませんよ？」

心配する人もたくさんいるのですからね」

そう心がけますが出来ないときはおゆるしくだすことセドリクは素直に言った。

「あなたには男の子と女の子のふたつの名前をつけたけど、本当はどうが良いくかしらね？」

「わたしは自分を王女だと思つたことはありません」
セドリクはきつぱりとした口調で迷いなく言った。

「あら…」

テレーザは心配せずにセドリクの顔を見たので、セドリクは何か気になる」とでもあるのか母に尋ねた。

「あなたが元気なら何も心配なことはないわ」
テレーゼは目を閉じて軽く頭を振つてから、再び笑顔をふりまいてセドリクに接していった。

それからしばらくしてセドリクは15歳の誕生日を迎えた。
その日、レオンがいつものように遊びにやつてきたのだが、プレゼントを見るのは後にしてほしこと言つた。

そんなことをこつのでセドリクはいつたい何をくれるのかと首を傾げたのだが、部屋でドレスの入った箱を渡されてびっくりした。

「お母さんが贈り物をかつて言つたんだけど気に入つてもうかると良いな。

あんまり嬉しそうじゃないねぇ…」

「驚いたよ…こつたい何かと想つたけどこれは予想しなかった

セドリクは手を点にしてしどろもどろ言つた。
レオンはまあいいやと言つた感じでセドリクに向き直ると、「いつも一緒だつたけど、これからも君が困つた時は僕が飛んでいつて助けてあげるからね」
なんてセリフをセドリクに言つた。

「ふーん。

君の助けなんていらないけどね。ありがとう
セドリクは照れを隠してそう言つのが精一杯だつた。

その頃、名君の誉れ高いリーヴェ侯爵の娘ユリアナは領地にある館の地下から年代物のワインを探しに行くとき

皇太子に対する反乱に父が黙認していることを知つた。

最初それは文書や暗号で交わされていたのだが、ひそひそ話を偶然耳にしてみればそれは現実性を大きく欠いていたのであまり気にはとめなかつた。

父も軽く受け流していたのだろう。

ただ、幼なじみのラインには知らせておいてもいいのではないかと思つて会う機会を伺つていた。

これがひょんなことがきっかけで後々大きな問題に発展するとは、その時ユリアナは考えもしなかつた。

南エーデルラント王国にある帝都ローゼンでは君主が頭を悩ませていた。

どうも最近感情的で良くない。昔とは人が変わったようにセドリクに接してしまつ。

明らかにハインリヒは感情をセーブできなくなつていた。

異常性に気付いたフォーデルバイデ侯は孫のルプレヒトにそつと打ち明けた。

「ユリウス陛下ですか？」

ルプレヒトがまたかといった表情で祖父を見る。

「私は陛下の侍医として見過しすことはできん。ルー、萬一の時はセドリク様を頼んだぞ。

私も持病を抱えてはもう先は長くはない。この国の行く末だけが心配じや。」

「心得ております、御祖父様。ですが、何故、セドリク様だけにありのよきな態度を取られるのでしょうか。弟のユリアン様との扱いはまるで違つ……」

「これは精神疾患ではないのだ。何か異質なチカラで遠ざけておられる。ヨリウス陛下はセドリク様を後継者として認めたくないあまりに

心のたがが外れたようにならせられた。人の心に魔が棲んでおる。」

「御祖父様らしくありません。いつたいどうされたのか…………」

ルフレヒトは非科学的な祖父の言動に呆れた。「そんな目で私を見ないでおくれルー。」

「すみません御祖父様。ですが、仮に先程の話、ユリアン様を後継者にされるのであれば、大貴族の支持を失うことになるのではないでしょうか。

国内外の有力な諸侯から愛されているセドリク様をむやみに皇太子の座から追うとなると、普通は反対されます。

確かにセドリク殿下は今は女のお子様でそれを隠されていますが、そう決められたのは陛下なのではなかつたのですか？」

「だが現実には追放しようとなさつておられるよ。むろん理論的ではない。このままでは王位を巡つて兄弟喧嘩にならないか不安で仕方がない。はては皇帝の座を争うかも知れぬ。」

「…………では、万一件があるは私がセドリク殿下にお仕えします。そりながらいよいよ尽力いたします。それでいいですね？」

「うむ。くれぐれも注意してくれ。」

「…………はい。」

争いのない樂園に見える国で不穏な空気が漂い始めていた。

皇帝の心の中に魔が棲んでいたところ。

現実ならば、大変なことだつた。

だが、日々にハインリヒ（ヨコウスケ）はセドリクを遠ざかるようになつた。

父親に愛されたいセドリクにとっては心が休まらない日々が続いた。

何がおかしいところではない。

王妃テレーゼはリーザ（セドリク）を心配そうに見つめ、度々ハインリヒにもつと優しくと進言したが、

妻も夫の尋常ならざる異変に気付いていた。
だが、テレーゼは愛するリーザに優しくするだけで、現状はこれといつて改善されなかつた。

「お母さま……あなたに愛されておきながら、父親の愛が欲しい等、わたしさ贅沢ですか？」

ある日、耐え兼ねてセドリクがテレーゼに尋ねた。

「あなたは男の子として育てたし、父親に理想を求めるのは自然なことよ。リーザ……もう一度聞くけれど……あなたには女の子としての名前もつけたけど、本当はどうがいいの？」

「…………わたしは王子です。王女だと思つたことはありません。」

「…………拗ねないで。」

「すみません。意に沿わぬ子供で。そんなわたしではお父さまのお役に立てませんね。」

「…………リーザ……」

「お母さまはわたしに何をお求めですか？」

王太子ひしく？」「

「私は女の子のあなたが心配なのよ。本当ならばすぐ国外で平和に暮らせると思っていたわ。」

「わたしには守護すべき民がいます。祖国を見捨てたりはしません。騎士として、それが誇りです。」

「…………」

「わたしの命の心配をされていたのですね。心よりも。」

拗ねたセドリクにテレーゼは反論できなかつた。

そんな渴いたセドリクの心を慰めるのは、幼なじみのレオンだつた。ふたりは毎日よく遊んだ。
子供の頃からずっと。

ステイブルストン中尉が軍港から学徒動員された士官候補生と共に海軍の新型潜水艦に乗り込んで一日が過ぎた。

「まもなくフイールドバリア区域にさしかかる
ブリッジで艦長がステイブルストン中尉に説明した。

「海中なら航行可能とつかがいましたが大丈夫のようですね」

「そのようだ。」

ステイブルストン中尉、準備は万端だな？

中尉達はカッターで上陸してもらつ

初めて航行する海域に冷や汗まじりに艦長が語りかけた。

「ハツ、いつでも上陸できます大佐」

部下が通信ブイを巻き上げると、上陸作戦を開始した。

ゆるやかで静かな海岸線を見つけると小型の上陸艇で砂浜にあがつた。

人数にして僅か12名。

ローゼルツ海軍の監視の目を盗んで砂浜を走つて行つた。

明くる朝、フィロソフィアと同じ影大洋の軍事国家アルメリアの軍隊が上陸したのを知つたのは、

彼らが月明かりの絨毯の森と呼ばれるスズランの咲く森を進軍していた時だった。

彼らは森の中で放置されていた古い城を要塞がわりにしている最中だった。

古城に案内されるとアルメリアの女性士官の居るテントに案内された。

「私はアリシア・デ・コルトですねん。階級は少佐。坊やの名前は? かたくならんでも私はあんたらを食つたりはしやんで? 赤い巻き髪の女性士官は軽やかに言つた。

「ステイブルストン中尉です。

名前はハーディン・イグレット・ステイブルストンです。」

「ほう…東方系とのミックスぽいね。よろしくう。」

デ・コルト少佐の気むくな態度に士官候補生達の表情も

緩んだ。

しかしスティブル斯顿中尉の表情は堅こままだ。

「ふうん……軍部の事情でも知つてゐるみたいやね。」

アリシアが探りをいれる。

「自分は今回の任務前には国王陛下の救出作戦に加わつっていました。陛下を拉致したあなたの方の軍隊を許す気はありません。

たとえ、今は共同戦線をはつていると知つても簡単には許せませんよ。」

「たしかにあんたらの議会を齎してはいる。」

「この森は深いし広大や、あんたらが迷わんとも限らへん。この言語もはつきりせえへんし……このまま子供だけで行かせるのは気がかりや」

「ハーディン先輩……せつかくの好意ですから受け取つておきましょ
うよ~」

士官候補生の1人が情けない声を出した。

「しかしだな……陛下は彼女らの軍の支配下にあるし、彼女らの目的もはつきりしない。簡単に従えるか!」
スティブル斯顿中尉は拳を震わせた。

「忠誠心篤いんやね。うらやましいわ。

でも、偵察任務つて情報をいつひは握つとるんやけどな。」

「……議会も我が軍部も屈したのですか？」

「そのようやね。おまけに、上ほいの国も制圧しておかんと氣がす
まんらしいで。

そのための任務やつたんちやうへー。」

「…………あなた方は戦争をしていく國へー。」

「そうや。もつ戦争は水面下で始まつとるんやで。
兵器の質は圧倒的にうちらの方が優位やからこの国が降伏するのも
時間の問題なんやとちやう？

実際うちらは空軍の爆撃を待つへりいやよ。

やからうちらが何とかしてフィールドバリアを解除せんとね」

「フィロソフィア軍上層部が本当に、アルメリア軍と遠征を？」
士官候補生の一人ハワード伯爵アーサーが尋ねた。

「フィロソフィア王国の軍だけやあらへん。フィロソフィアの属領
やつたフェアディール連邦軍もや。
上は密約を交わしとるんやで。」

「馬鹿な…………」

アーサーは頭を抱えた。

「あんたらが、この森で迷つとる間に情勢はいろいろ変わつとると
ゆう事をまず知つておいた方がいいね」

「……もしかして、あらかじめ分かっていて上はハーデイン・ステイブルストン先輩をこの国へ行くように手配させていたんじゃないですか？」

マリン・スナイパーの役をしていたヘンリ・ジュン・ハワードが訝しざん。

「確かに私達3人は国王陛下ゆかりの者だが……」

額に指をあてて考え込むハワード伯爵に異母弟のヘンリが

「オレは違うぞ兄貴」

と、付け加えた。

「じゃあ、あんたら、これからどうするつもりなん?

本国からの命令を待つわけやろ?

でも、どのみちやることは一緒やと思うんやけどなあ……」

アリシアは困った様子で少年たち学徒を見ていた。

その時、フィロソフィア軍から司令書が届いた。伝令将校は丁寧にアルメリア軍人に敬礼した。

中尉は頭が痛くなつた。

おまけにフィロソフィア軍が到着するまでアリシアさんに同行せよという内容だつたからだ。

「ただ、この国の言葉が分からぬのがネックですよね、先輩」

「それが何とかなるかもしれん」

「何とかなるんならええんやけど~何かええテでもあるん?」

「……自分はこの国の言葉……聞き覚えがあるのですよ。

多分、自分が無くした記憶だと想います

「記憶喪失だつたんすか先輩!」

「…子供の頃、浜辺で陸下に拾われる前の記憶がないだけで、日常生活に問題はないからな

「でもビックリしますよ」

「ほんまかいな……あんたらほんまに大丈夫?」

「大丈夫、通訳くらいなら出来ますよ」

中尉はしつかりした口調で言った。

「ならええんやけどお」

張り切つて国を出てきたのに現実は厳しいなとステイブルストン中尉は想つた。

一刻も早く育ての親の救出作戦に復帰したいのに、新しく戦争を始める準備を進めなくてはいけないとは……。

そんなこんなであつたという間に1日は過ぎていき、彼らはアリシアが占領している古城に泊まることになった。

異変に気付いたこの古城の主であるディートリッヒ神父（ラインの弟）が父王ジークフリート25世に早馬を飛ばしたのは、これより2日後であった。

ディート神父とテンプル騎士は勇敢に戦つたが、

近代兵器の前に、特に機銃掃射の前に馬を狙い撃たれて敗走せざるを得なかつた。

ジークフリート25世とラインハルト王子はただちに軍を編成して霧深い森に足を踏み入れた。

「賊め……ディートが庭の手入れに戻らなければ気がつかないとこりだつたわ」

ジークフリート25世が不安げに次男ラインハルトに話しかけた。

「心配しなくともオレがいれば大丈夫だ父上。」

オレの神聖魔導を占領軍に見せてやる」「それは頼もしいが、封印された古代兵器を手にしていたと聞くぞ。

それに私はお前に皇帝の元へ一刻も早く向かつてほしいのだが

「…父上の身に万ーのことがあつたら叔母上が悲しむからだ。

テレーゼ叔母上が皇后だというのにまったく父上は…」

「セドリクは心配ではないのか?

お前のことだ、あの城が狙われる前に、妹の子であるセドリクが狙

われんとも限らん

「セドリクも神聖魔導を使つ騎士だ。

賊を追い払つてからでも遅くはない！」

アルメリア軍と交戦するトライインはまず風を制した。

不思議な風で弾丸が発射されてもバラバラと落ちてしまう。しかしそれにも限度があつて、兵士全員を庇いきれない。陣形を辛うじて保てる程度だった。

籠城する敵に決定打を浴びせられない。

しかも砲弾の雨を防ぎきれず、善戦するものの大局を制することが出来なかつた。

「」ひからも封印された兵器を再開発せねばなるまいな…

もつよからう。お前は皇帝のもとへ行つてハインリヒに兵器の封印を一時的に解くよう言つてきてくれ」

「ちつ！オレ一人なら何とかなるのだが……父上、無事でいてくれ。お前たちは父上の周りを術で固めろ」

配下の兵に指示をとばすと馬を帝都ローゼンに向けた。

前線の混乱に乗じて反乱が起きたのはその頃だつた。

反乱軍は民間人を盾にセドリクを捕まえると皇太子の座を退くよう要求した。

セドリクは要求はそれだけですか？

と言つと、あつさり応じる構えを見せた。

近衛士官のレオンがそれは出来ないと言つたのだが、わたしの務めは市民を護ることだ。

無論、次の皇太子を決めるのは皇帝陛下^レ自身であつて彼らではないと毅然として言つた。

それを聞いた天帝カリクトウスが激怒して、皇帝ゴリウスに軍を出すよう迫つた。

「あれははじめから皇太子にするつもりなど私にはなかつた。義父上が皇太子にしたようなものではなかつたか？」

ゴリウス27世ハインリヒが冷淡に言つと教皇カリクトウスはますます怒り出して自らの私兵を送り出すと共に近隣の諸侯、特にノルトラントやルーヴィル、フォーデルバイデの各選帝侯に軍の派遣を命じた。

彼らが救出の軍を編成していると、解放されたが怪我をしているセドリクが戻ってきたので、カリクトウスは怒りに任せて大馬鹿者と罵倒した。

セドリクはかえつて落ち着いていて、

畏れながら市民を守護するのが第一の使命でござります。無用な争いはどうかおやめくださいと進言した。

北エーデルラントの王太子ラインが帝都ローゼンにやつてきたのはそのような微妙な情勢下であった。

セドリク！お前らしいとラインが腹を抱えて笑うので、ますます頭に血がのぼつた祖父カリクトウスはラインを錫で殴つた。

ラインがこんなことをしている場合ではないと我に返ると選帝侯や天帝、皇帝の居る前で封印兵器の一時解除を提案した父王の親書を渡した。

甥のラインからコロウス27世ハインリヒのもとに親書が手渡されると、

事態を重くみた皇帝は条件付きで承諾した。

そういうた経緯で古代兵器群の氷山の一角が田の田を見ることになったのだが、開発期間が短く、また間に合わなかつた。

全軍に配備するよりも早く竜騎士団を誇るノルトランントの王は和平調印に出向いた所を暗殺され、また帝都ローゼンはノルトランントの制圧によつて制空権を失い包囲された。

エーデルラントの言語が分かる者として、ステイブルストン中尉が最後通牒に現れた。

「ステイブルストン中尉と申します、皇帝陛下」

「敵ながら天晴れといつたところか…」
ハインリヒにいつもの霸氣はない。

「フィロソフィア、フェアティール、アルメリアの空軍が帝都を包围しています。

降伏いただけない場合は帝都を絨毯爆撃します。
陛下、どうか無用な流血は回避していただきたい」

ステイブルストン中尉が叔父に話しかけると、ハインリヒは悟つた
かのように片手をあげて玉座から段をおりてきた。

「いつかこのような日が来ると想つていたよハーディン」

「は？」

突然名前を呼ばれてスティブルストン中尉が困惑した。

「いったいどこの賊と思えば甥の軍だつたとは…
誘拐されててつくり死んでいたものと想つていたが、
よく帰つてきたな。」

「はい？」

「どうした？』

「聞けば、弟のディートリッヒ神父を負かせたらしくな
てつきり賊かと思えば、北エーテルラントの正当な王位継承者では
ないか」

「王位継承者？」

「ふむ…恐怖で記憶をなくしたか？』

自分のおかれた立場をよく理解していないと見える

「いえ、自分は、任務で参つたわけであります。皇帝陛下。」
「任務…か。良からう、いづれは君のものになるかもしけぬ国だ。
統治するいい機会になるだらう。」

こうしてあっけなく戦いは幕を閉じたかに見えたが、
南エーテルラントの王で皇帝であつたハインリヒは、妻のテレーゼ
と養子のコリアン・フリードリヒをいち早く国外に逃すべく
古代兵器ヘリコプターに乗せたばかりだったので、どこか安堵して
いた。

帝国は占領軍によつて瓦解するかも知れないが、いづれ復権出来る日も来るだらう」と。

もつとも帝国内外の反乱軍によつてヘリコプターが撃墜されたのを知つたのは占領軍に後事を委ねた後であつたが……。

レオンに連れられてセドリクが城の地下水道を歩いていたのはハインリヒがステイブルストン中尉と話していた頃だつた。

「……まさか僕が逃げ出すことになるとはね。覚えていろよレオン。

「解放軍を組織して戻つて来るまでの辛抱だよリーザ。
君は怪我人だから、当分は無茶させないけどね

「レオンと一緒にで、どこか空氣は明るい。

「やるべきことはたくさんあるな。まあ、お前となれば出来うつな気がするよ。」

地下水道から、月明かりの絨毯の森に出る。

「月明かりでスズランが綺麗だねリーザ。」

「綺麗だけど、きな臭くないか?」

「そういえば……」

「遠くで爆発した……」

警戒しながら爆発地点に向かつと帝室の紋章が施されたヘリコプターが墜落して炎上していた。

「みんな死んでる…………」

「お母ちゃんーー」

「えつ…！」

レオンが振り向くとセドリクが声を上げて泣いていた。

スズランの…聖母の涙の花だけが月明かりの向こうを悲しく照らしていた。

セドリクは埋葬するとき、母から貰ったイヤリングの片方を外して母テレー・ゼの耳につけてあげた。

天国への階段と呼ばれるスズランの花束と一緒に。

「さつと祖国を守つて死んだんだ……」

レオンはそんなセドリクを慰めた。

レオンは疲れきった様子のセドリクを船に乗せると、横にならせた。

「お母さまの為に今まで頑張つてこれたのに…」
セドリクの疲れが激しいからだ。

「君は怪我人なんだからね。ユリアンのこととも考えるのは今はやめ

よつ……どうしようもなかつたんだ……

「…………うん……」

セドリクは力ない。

レオンは海を越えてローバーン王国につくと、まずセドリクに普通の生活をさせるように心がけた。

解放軍の結成は無理かもしれないと思いつながらも胸中はセドリクだけでも無事で良かつたと考えていた。

セドリクの具合がすっかり良くなつて、生活費が足りなくなつてくると、セドリクは近くの学校で働きだした。

その頃になると、この国もフィロソフィアの軍に対抗できなくなりつつあり、

ローバーンの王子に加勢するべく、ローゼルツ帝国の北方最大の領邦国家のひとつであつたノルトラント王国の王子アンセイス・アンセルムス・ファレンティーンが当地で解放軍を組織した。

竜騎士の彼は竜騎士団を再編成してフィロソフィア軍に対抗した。優秀なドラゴンはその羽で数々の攻撃を無効化して一定の戦果をあげていた。

「アンスが来ているのね」

すっかり女口調になれた感じのセドリクが休日のお茶の時間に新聞を見せて言った。

「行つてみるかい？ リーザ」

「…………悪くないけど、この普通の暮らしもすてがたいわ。なんてね。冗談よ。

アンスが頑張つているのなら、さりげなく応援に行ってあげるのが

親友のつとめよ」

「そういうと想つたよ。でも今度こそ君は無理しちゃダメだよ。
王様も無茶は望んでいないからね。」

雪の降る中2人は砦に向かつた。

「よつ！」

お前ら生きてたのか。悪運強えな！リストからもれて行方不明だつたからずつと探していたんだぜ？」

アンス王子が笑つて出迎えた。

「ここにはノルトラントの軍人が多いから、ヒーデルラントの宮廷にいたような時のギチギチした空氣はないぜ。安心して過ごせよな。武器は…持つてているみたいだな。」

聖遺物を一つも持ち出すなんてしつかりしているよな！」

セドリクの持つ聖なる大剣ロザリオ・ディレクタフロンと、レオンの持つ聖剣オーカーを確認するとアンスが笑つた。

「そつそつアルベルもいるんだぜ？」

アンスがアルベルの部屋に案内する。

アルベルはオルガンを弾く手を止めると「良かつた…よくぞ」無事で！」

とセドリクの無事を泣いて喜んだ。

「アルベルは泣き虫ですね」

セドリクがからかうとアルベルは、これは喜んでいるんですけどムキになつて反論した。

それはそうだ。アルベルにとつてセドリクは最愛のひとなのだから。アンスは従弟のアルベルの心の内を思い出した。

この知らせは瞬く間に国王夫妻と王子達の耳にはいることになり、セドリクと従兄のレオンハルト王子の無事を心から喜んだ。

ローバーン王国の南にあるサミニティア王国の王ラルスはこの知らせを聞くと直ちにセドリクに援軍を送ることを決めた。

サミニティア王室とローゼルツ帝室と南エーデルラント王室は先祖を同じくしていく、現在も親交が深かつたのだ。

（訳注：小説版と漫画版の第1部第1章終了間際でセドリクはレオンがハーディングの追つ手から庇つた際に生き別れており、レオンはエーデルラント地方にとどまっていた。

この為、第1部第2章冒頭では放心状態のセドリクと記憶喪失のハーディングが細かく描かれたのだが当作品では省いている。この作品を500ページに編集出来るか疑わしいので、当作品はハイライト版の性格が強い。）

解放軍の志氣があがつていた頃、ステイブルストン大尉は帝都ローゼンの執務室に自身の弟だというラインハルト王子を招いていた。

「検査の結果が出た」

「そうか…」

「間違いなくあんたはオレの兄だ。遺伝子情報が兄のものと同じだつたそうだ。」

「にわかに君が弟だと信じられないがな…」

「従妹のセドリクは覚えていないのか？」

「小さい頃兄上がいつも面倒をみていた」

「セドリクの名前は聞き覚えがあるが……すまないな……そこまで記憶は回復していない。」

「まあ、焦ることなんてないよな」

腰に手をあてて喋っていたラインが腕を組んで笑うと机の上の書類を見た。ラインが笑うのは珍しいのだが、

それも覚えていないハーディンは当たり障りのない範囲で説明した。

「元老院を再編して議会を作らないといけないんだ。

この国は今まで専制政治だったのによく今まで統治してこれたな。驚異にあたりする」

「古い議会政治はセドリクが興味を持つていたな。

あいつはオレと違つて政治家になるつもりだったみたいだから

「…セドリク王子と従兄のレオン王子が生きていたそうだ」ステイブルストン大尉がラインにそう告げた。

「2人が陥落のどさくさに紛れて逃げたのは知つている。セドリクは怪我をしていたが元気になつたみたいだな。」

「解放軍を組織していると言つことは？」

「そこまでは知らない。アンス達と合流したか。」

「私は近いうちにローバーンに行くことが決まつていて、君はどうするつもりだね？」

君さえよければ一緒に来てくれて構わないそうだ。医師は不足しているから…」

「たしかにここにいてもろくなことは無いだろつな。退屈しているから、ついていってやってもいい

「セドリク王子に会えることもあるだろ。」

無論、君が解放軍に荷担しないのが前提だがね。ハインリヒさんも来るそうだ。」

「叔父上も？」

「向こうで会談を予定しているから、それで来られるそうだ。」

「会談をしにローバーンへ？」

「実はセドリク王子が先日の我が軍との交戦中に王室の血をひくバラの伯爵アーサー・ケネス・ハワードを怪我させたそうだ。彼は私の部下でね。落馬した際に頭を強く打つて意識がない。王室の方もお越しあそばせる」

「……会談には興味がないが…オレにいつたい何をしろと?」

「伯爵を診てほしい。伯爵が回復したら両王家も和解できるだろ?」

「仕方がない。セドリクも余計な仕事を寄越すものだ……。」

「ラインはしぶしぶ了承した。」

「では至急荷物を纏めてくれ。早速ローバーンのアーサー・ハワード伯爵のもとに飛んでもらひ」

ホーエンツォザー家の兄弟は空路ローバーンへ向かうとハイデルベルク城へ急行した。

ここが会談の舞台に選ばれたからだ。

今回の会談ではちゃんとエーテルラントの宮宰も招かれていて、占領計画が順調なのを影大洋三國の高官たちがアピールする目的もあつた。

会談というよりは各国首脳の密談に近かつたのだが、一定の和平交渉が行われた。

アンス・ファレンティーン王子達の解放軍とフィロソフィア軍が特に制空権をめぐつて熾烈な戦闘を繰り返していたのだが、和平交渉の為、一時休戦となつた。

和平案はかねてから検討に検討を重ねて周到に準備されていたのだが、フィロソフィア王の孫アーサー・ハワード伯爵がセドリクとの一騎打ちで意識不明の重体に陥つたことにより予定より早められることになった。

ハワード伯爵の異母弟ヘンリイは異母兄の仇を討とうとしていたので、セドリクと話すことなど何もないといまいましく言いはなつと、和平交渉よりも寧ろセドリク王子暗殺計画の方に共鳴していた。その為、和平交渉にはハワード家のバールバラ伯爵アーサーの母マティルダ王女が赴くことになった。

豪雪地方のハイデルベルク、一月の寒い口に各国首脳は一同に会した。

「前の和平交渉では父ちゃんがが暗殺されたんだが、今回はまともに行えそうだな」

アンスが机の上でペンを回していくとマティルダ王女が話しかけて来た。

「先代ノルトランツ大公のお悔やみを申し上げます。ファレンティーン王子には」「迷惑をおかけしましたね」

「戦争の虚しさを痛感ただけだ。

謝つてもうつて父が帰つてくるわけではない

そう返答するに留めた。

「あれは事故だと聞く」

アルメリアの大臣が重い口をひらいた。

「…それについて論議をしにきたわけではあるまい」
皇帝の座を追われたハインリヒが両者を窘めた。

「色んな者が死んだ。

ハインリヒの妻と三男も殺された。

王侯貴族から本来殺戮の対象外であるべき非戦闘員までな…」

サミニティア王ラルスの口調も重い。

「わらわの息子もいまだ昏睡から覚めぬ…。

これ以上の犠牲者を出さぬ為にみな参ったのです！」

マティルダ王女はそう発言すると場は静肅になつた。
マティルダ王女は盲田と聞く。月夜の姫と呼ばれた女性だ。そういう
つた囁きが交わされた。

「ノルトラントは今、どうなつているんだ?」

アンス・ファレンティーンがマティルダに尋ねた。

「かの地は先代大公グスタフ殿が治められています」

「そうか」

じーちゃんが、とアンスは心の中で付け加えた。

「本日は伯爵の異母弟君が来るとうかがっていたのですが…いかが
なさいましたか?」

渦中のセドリクが礼儀を重んじながらフイロソフィアの武官に尋ね
た。

「セドリク、彼は来ない」

武官のひとり、ハーディン・ステイブルストン大尉がスマートに返答した。

「そうですか…
教えてくれて感謝します」

「ヘンリ・ジュン・ハワードには氣をつけなさい。セドリク王子。
彼はあなたを恨んでいます」

「心にとめておきまや」

ところで、トローバーン王が切り出した。
何故休戦の申し入れを？

「そもそも我が国はアルメリアの支配下にあり、これ以上、王家から
の犠牲者を出さないためです」

マティルダ王女は難しい表情で説明した。

「確かに無益な戦が多かつたが、ずいぶんと弱腰ではないか王女よ」

「国王陛下は戦を好みません。今回の事に頭を悩ませておいでです。
私はせめて、娘としてのつとめを果たしたいのです」

「そうであったか…」

会談は平行線を辿ったが、マティルダはこの話とは別に内密にだが
エーテルラントの返還問題に言及した。

時期が来たらハインリヒに国を返すと言つのだ。

そのかわり、フィロソフィアとフュニアティールには攻め込まないでほしいと告げた。

「あの戦いはなんだつたんだ。クソッ！」

アンスの怒りはやり場がなかつた。

「わたしだつて！」

怒りの矛先にあつたセドリクが本音を言つた。

伯爵アーサーをフィロソフィア軍に引き渡すと、ラインは神聖魔法で回復するかどうか試みた。

効果は数カ月してからあらわれて、アーサーは目を覚ました。

ヘンリイはラインに礼を言つとアーサーの回復を心から喜んだ。
そうして月日は流れ春になつたころ、ステイブルストン少佐の加わる国王救出作戦はようやく成功し、
やがて彼らは国に帰ることになつた。

解放軍がエーデルラントに凱旋帰国した時、ノルトラントの鉄拳大公グスタフはセドリクとレオン、ハインリヒに眞実を告げた。
眞実を告げる前に帰つて来てくれて良かつたと言つたが、セドリクとレオンはショックを受けた。

レオンはセドリクに淡い恋心を抱いていたと言つと、セドリクは馬鹿だなと言つて諦めた。

レオンはしばらく空気が抜けたようになつていたが、いつしかセドリクの姿が見えないので、あちこち探した。

エーデルラントの遅い春、春の女神オスター・ラの花スズランが、月明かりの絨毯の森に咲く頃…。

ステイブルストン少佐の帰国之际に、ハーディン・ステイブルストン少佐にセドリクはひとつ告げた。

「ついてく

第1部 完

第2部第1章

フィールドバリアの晴れた海原を空から眺めながら、輸送機が温暖なフィロソフィアに到着すると、

ステイブルストン少佐は国王夫妻に謁見した。

彼らはセドリクの渡来を歓迎すると、ステイブルストン少佐には今回功績を讃えてナイトの位を授けた。

ステイブルストン少佐の仕事は以前よりも忙しくなったが、暇を見てはセドリクを観光に連れて行つた。

やがて新学期が始まる秋になるとハーディンはセドリクにこう言った。

「ハイスクールに行かないか？」

お前も年頃だし、普通の暮らしなり通つ頃だ」

ハーディングが夕方、任務から帰つてみると田舎の軍の手袋をひっぱりながら、セドリクにすすめた。

「それは楽しそうだけど、学費とかどうするの？」

セドリクが家計のことを気にしたが、生活費なら叔父上からいただいていい、と、今を楽しむように言った。

「オレの今の仕事の関係上、

フェアデイールとの国境沿いにあるハイスクールで時々部下の家にホームステイしながら通つことになるかも知れないが、送り迎えはする

ハーディングが普通の生活を楽しむようになつたので、面白そうだがセドリクは通りにしてみた。

ポプラの並木道を通りて、彼はハワード邸にセドリクを連れて行つた。

ヘンリイは当初セドリクに対し良い印象を持つていなかつたのだが、セドリクが女だとわかると女相手にムキになるのはバカラらしいと言つて

ムスッとはしているが態度を変えていた。

すっかりよくなつた伯爵のアーサーが先輩であるハーディングが忙しいことを知つているので色々気を利かせてセドリクを家に招いたのだ。

そしてハイスクールにはフイロソフィアとフュアティールー国間の生徒が通っている

新しいハイスクールで、学園生活を満喫することになった。

セドリクは同じハイスクールに通つフュアティールの士官候補生のロウリーの弟ティムや

ウェニーの妹リン、そしてジョシュアの妹シャナンと仲良くなり、彼女たちと良く遊ぶようになった。

毎日がとても明るくてセドリクはいつも楽しそうだった。

セドリクはハーディンを昔から頼っていたのだが、こうしてまた頼れることができて、感慨深かった。

冬が来ると、ハーディンの異母弟のラインが遊びに来て、仲良くなっていることを話したものだった。

もっともハーディンにはその記憶はあまりないのだが弟の機嫌が良いので、それも楽しむことにした。

やがて海外のフィロソフィア領で独立戦争が起つると、ハーディンはステイブルストン少佐として戦線に出征していった。

時々、ラインかルプレヒトがハーディンの家を訪れるようにしていたので、セドリクはあまり寂しい想いをすることもなかつた。

その頃から、祖国の南エーテルラント王国の王都ローゼンでは、国王ハインリヒが選帝侯達を呼んで新しい皇帝を選出する準備にかかっていた。

南エーテルラントとルーゴィルの王太子レオンは次期副帝として、ノルトラントのアンセルムス・アンセイス・ファレンティーンは次期正帝ラインの皇太子としてそれぞれ正式に迎えられた。

長期化する独立戦争が次第に暗い影を落としてはいたが、その列強のパワー・バランスから世界は武装平和と呼ばれる時代になっていた。

ラインが次の正帝に立てられることも関係していて、次第に彼がハーディングの家に来る回数も減つていった。

ヘンリ達が士官学校を卒業して海軍少尉として任官して出征した頃、両エーテルラント王国は概ね平和だった。

セドリクはハイスクールを卒業すると、ハーディングもヘンリも国にいないことも関係していたのだが、一旦國へ戻ることになった。

ハインリヒがセドリクを皇帝のパラティーンとして再びエーテルラントに呼び寄せたからだった。

ハインリヒは当初これに難色を示していたが、ついにセドリクの自立を考慮してこれを承認する決意をした。

「リーザ、本当に母国に帰っちゃうの？」

シャナン達はその話を聞いて花束を持ってセドリクのもとを訪れた。
「この国で新しい仕事を見つけることも考えたのだけど、
自分に与えられた義務を放棄することは…わたしにはやっぱり出来
ないの」

「義務？」

リーザは確かエーデルラントって国から来たんだつけ。
義務つて聞くと何だかお堅いわね」
リンがセドリクに尋ねた。

「わたしは南エーテルラントの王家に産まれたのよ。
わたしは国から逃げて来たのだけれど…、
自分に与えられた務めは果たさなくちゃ…」

「国には仕事があるんだね」

ティムが言った。

「わたしにはやりかけの仕事があるの。
あなた達のことは絶対に忘れないわ！」
セドリクは荷物を纏める手を止めて友達に話した。

「シャナン達はその後、勉強も仕事も順調みたいね。」

一緒に大学には行けないけど頑張つてね

「ありがとうリーザ」

シャナンはミス・ハイスクールでモデルの仕事もしていた。
その愛らしい波打つブロンドをかきあげてセドリクの手を握つた。

「いつも帰つてきてね。

私達は貴女の友達だから

」
その言葉にセドリクの胸は詰まつた。

「いつも弟達の面倒をみてくれてありがとう。
弟達も寂しがるだろうけど、いつかはこうこう日がくるから、いい
勉強になるよ」

8人兄弟の一男ティモシーが言つた。

「うん。

それとティムも士官学校に進学したのね」

「つちは親父が将軍だし、兄貴も将校になつたからな。」
俺もそのへんちょっとばかり期待されているんだよ

「貴方のお兄さんの口ウリーは元気なのかしら?
彼も戦場に行つているのでしょ?」

「兄貴からはたまに手紙が来る。

戦火の中で恋したつて噂だけど…だから元気なんじゃねえかな?」

「そんな噂があるのね!」

セドリクはクスッと笑つて見せた。

「そつそつティムのお家のお隣に住んでるリンの方は?

兄貴のウイニーは元気なの?
シャナンが近所話をはじめた。

「ウイニーは除隊することばかり考へてるわ。
任官拒否しておけば良かつたってそればかりな。
氣弱な性格してるからね~」

「ウイニーは心配だわ。

ヘンリだつていつも氣にしているのよ。」

ヘンリの家にホームステイしていた事のあるセドリクは心配げにリンを見た。

「まあ、ウイニーが戦死しないようにエーテルラントの教会で祈つてやつてよ」

リンが苦笑混じりに兄の心配をする。

「もちろんよ。

それとみんなにも手紙もいっぱい書くわね」

「楽しみにしているわ!」

「身体には氣をつけるよ。

お前も軍人なんだから」

そんな話を4人は夜が明けるまで交わした。

エーテルラントの北、ノルトラントの更に北にある小国では、ちょうど夏祭りをしていた。

国王が神々に祈りを捧げ終わると、祭りの扮装をして、お忍びで城下町に出ると一軒の、まだ準備中の酒場に足を運んだ。

「お祖父ちゃん」

酒場で働く女装のルルが老いた王を見ると、グラスを拭く手を止めた。

「お前が養つてこらあの子…ロスヴァイセは元氣かね?」王はカウンターに腰掛ける。

「もちろん元氣だよ。お祖父ちゃんは元氣なさそうじやない。ずいぶん疲れた顔をして…ますます老けたんじやない?」ルルはずいぶん心配そうに祖父を見た。

「……実はな…セドリク王子が國へ帰国するらしい」

「それはまた…

外交問題が再燃しなきゃいいけどね…」

「お前の父親はまだ幼かったセドリク王子が、父方のマクシミリアン王子の父親に脅されたそうだが…

帝国への併合の際、セドリク王子が軍事介入してきた、あの時から未だ行方不明じゃし…

これでは和解できるものも和解できんのう」

「そうだねえ…

一体どこに行つたのやら…」

困ったようにルルはそう言いつとウイスキーをロックにして出した。

「まったく…若い王子にも困つたものじやな…
お前はお前で… じつだし…」

深くため息をもらしながらウイスキーをのむ。

「ハインリヒにも釘を刺しておかねばならぬ…」

そしてセドリクは月明かりの絨毯の森を抜けて湖の城に帰ると、挨拶もそこそこにその話を父王から聞いた。

「マクシミリアンが絡んでいたなど初めて聞いたが、 一体あの時何があつたんだね？」

話してみなさい

「申し訳ありませんがお話できません」

セドリクは申し訳なさげに父親に返事した。

「しかし、彼らと話し合つて必ずしも何かが解決するといつわけではない。」

お前が軍隊を非武装地帯に入れた時に交渉は決裂したのだから…」

セドリクが士官学校を出て間もない頃こんなことがあつた。

父親の話し合いの場に軍隊を入れたのだ。

この時の混乱に乗じて、ルルの父親は何者かにさらわれてしまった。

問題はいつも同じである。何年もたつた今もまだルルの父親は見つかっていない。

当然セドリクはその責任を問われた。

「私はかつて異母弟と帝位を争つたが…異母弟の子マクシミリアンも事件に関係していたのだな？」

「…………陛下と叔父上の喧嘩話になるとは思いましたが、詳しい話はお話できません。

わたしは皇帝陛下であられたお祖父さまと約束していますから」

「お祖父様と約束？」

「お祖父さまはまだ兄弟で争わなければないこと仰せられ、わたしに約束をさせました。

その約束が何であったかはお話できません」

「…………やうか…」

ハインリヒは交渉が決裂したのは自分にも非があったのだと知るため息をついた。

56

「とにかく、お前も私のパーティになるのだから軽々しい行動は慎むよ(ひ)

ハインリヒはそう言いつつセドリクを注意した。

「では友達に挨拶でもしてきなさい」

セドリクを謁見の間から出すとセドリクは階段を下りて幼なじみ達に会いに行くことになった。

一階の中庭の噴水の前でアルベルはヴァイオリンを弾いていた。セドリクは足を止めてその幽玄で奥行きのある音色に耳を澄ませて聴き入った。

そして演奏が終わると惜しみなく拍手を送った。

「リー……セドリク様！
もう帰ってきたんだ？」

それに気づいたアルベルがセドリクに駆け寄った。

「久しぶりだね。

元気そうで良かつた……」

セドリクが胸に手を当てて話す。

「君こそ元気そうでボクも嬉しいよ。

また逢えて良かつた」

アルベルは満面の笑顔で笑つたので、セドリクもについつと微笑んだ。

「セドリク様、夕食はどうするの？
良ければみんな誘つて一緒にどう？」

「良いね。みんな元気かな？」

「元気、元気」

ヴァイオリンをケースにしまってスコアを脇に抱えると、
アンスの仕事場に向かった。

そのときアンスはちょうどブリーフィングを受けていて、しばらく待つことになつたのだが、

ふたりは楽しそうにお喋りして過いした。

庭の薔薇のこと、今書いている楽譜のこと、料理の話にお菓子の話、
それと音楽院に通つたこと……色々話した。

やがてアンスが出てきて、片手をあげて挨拶した。

「元気だつたか？」

ハインリヒのオッサンと仲直りできたみたいで良かつたな！」

ハインリヒは表向きセドリクを長いこと避けてきたのだが、生活費や学費を陰ながらハーディンに送つたり、

親らしいことは一応していた。

だが、そんな事を知らないアンスは、セドリクがハインリヒのパラディンになるということを和解したのだと思った。

「色々問題を抱えているけど、まあそれなりにつまむいけるとは想うよ。」

それよりラインの皇太子になるみたいだけよく受け入れたな

セドリクが不思議がる。

アンスもラインも「うう」た政治的な話は好まなかつたからだ。

「それは考えたんだけどな。

ラインの奴ばっかりに押しつけるのもかわいそそうだから、少しくらいこは手伝つてやることにしたんだ

「へえ！」

僕も応援するから頑張りなよ。
セドリクがにこやかに祝福した。

「それでさ、アンス、みんなで夕食を食べない？
つもる話もあるでしょ
アルベルがアンスを誘う。

「いいぜ！仕事が終わったらどこに行けばいい？」

「宫廷礼拝堂は？」

あとレオンさんも誘いたいんだ」

「わかった。じゃあ宫廷礼拝堂でな

アンスは手を振つて仕事に戻つた。

「宫廷礼拝堂？」

セドリクはアルベルに気になつたことを聞いたとしたのだが彼はセドリクにとって意外な事を口にした。

「レオンさん、従軍神父になつたんだ。
セドリク様、何も聞いてなかつた？」

「全然、今初めて知つたよ。

そうだつたのか…」

セドリクはレオンをふつたことを思い出して考え込んだ。

そして知らなかつたとはいえ実の妹に恋心を抱いた罪の意識が、
彼を軍人から一人の聖職者に導いたのだとしたら セドリクは
事の責任を感じられずにはいられなかつた。

「どうかしたの？急に黙つちゃつて」

アルベルの声に現実に引き戻されるとセドリクは

「ああ、何でもない。さあ、レオンのところに行こう」
そう言うのが精一杯だった。

アルベルは心配せずにセドリクを気遣うのみ。

宫廷礼拝堂では選帝侯のひとりティートリッヒが神に、静かに一日の無事を祈つており、

彼の従兄のレオンはパイプオルガンで讃美歌を厳かに伴奏していた。

アルベルたちが宫廷礼拝堂の扉が開かれると中に入ってきたのをレオンは見て、オルガンを弾く手を緩めた。

テンポの乱れたカンターダが彼の心理状態を表現しているかのよう。

「リーザ！」

「おお！セドリク様！お帰りなさいませ」

レオンが言つたとほぼ同時にティートは従姉に駆け寄つて再会を喜んだ。

「ティート、レオンはオルガンを弾けるよになつたのですね」「さようです殿下。演奏家のアルベルと過ごすことが多くなりました」

「そなんだ。いつもアルベルに教えてもらつたりしているんだ。ありがとうアルベル」

レオンがいつもと変わらない優しい口調で言つので、セドリクの方も気が楽になり

自然とただいまを言つことが出来るのだった。

「レオンさん、ディートリッヒ様、今夜は皆で食事会でも楽しみませんか？」

セドリク様の、帰国を祝つて…」

「レオン、仕事は？」

「今日は休日だから、大丈夫だよ。もちろん喜んでー。」

「ありがとうございます」

「そのうちお父さんが来られると思つたんですけど…」

「休みの日はお父さんをここで待つことが多いんだ」「うん、陛下にお話しあつつかな？」

「夜はお父さんと夕食をとることが多いんだ。君は外国にいたし、独りじや寂しいと思つて」

「そうだったのか。わたしの留守を守ってくれてありがとうございます」

「セドリク様、何か食べたいものとかある？」

ふいにアルベルが聞いてきて、セドリクは少し考えをめぐらせると結論を出した。

「そうだな。

…湖のニジマスとかその他の食べたいね

「じゃあ湖で釣った魚でも食べる？」

「これから？」

「そう」

「お父さんも誘つたり？」

レオンがジョークまじつて叫びつ。

「陛下はお忙しいだらう」

「私がどうかしたのかね？」

廷臣にかためられた富廷礼拝堂の主が言った。

「ああ、お父さん。ちゅうどよことこうへいらつしゃいました。
皆で今夜の夕食の話をしていたのですよ。

セドリクは湖の魚が食べたいって言つかり、

これから釣りでもしようと思つて。

お父さんも「一緒にどうですか？」

レオンがすこぶる機嫌良さそうにハインリヒに話しかける。

「うーむ」

ハインリヒは休みの日も仕事が残つてるので頭を悩ませるが、息子の問いかけに対するこたえを探つていた。

「せっかくの休日ですし、いかがでしょう？」

「長留は出来ないがそれでも構わないかな？」

「もちろん構いません。

セドリクも喜びますよ」

「ふむ」

そうしてハインリヒが富廷礼拝堂での仕事をしてから、ボートを出

して釣りを楽しむことになった。

ハインリヒは仕事の都合で長留は出来なかつたが、よく釣つた。

釣れた魚を厨房に預けて再び富廷礼拝堂でアンスの帰りを待つことになつた。

やがて日が暮れなずみ、軍服姿のアンスがやつてきて幼なじみの再

会を再び祝つのだつた。

「やうか。よく釣れたか！

所でラインには会わなかつたのか？」

「ライン？

まだ会つていなければ、フォーテルバイデ候のところにいるだらうか？

でも休田だから、どこに居るのかはわからぬ。

ディートは何か知つてませんか？」

「兄上は今朝早く出かけられましたが、今はもう自分の部屋に戻つてきているのではないか？」

それで王宮にあるラインの部屋に足を運んだ。

「何でお前たち……そろそろと」

ドアを開けるなつラインはつぶやいた。

「階、帰国を祝つてくれてゐるんだよ」

「オレはお前とよく会つていたから何とも思わん」

ドアを閉めようとするラインだったが、アンスが足を挟んだ。鉄板が入つてゐる。「ついに軍靴だ。

「アルベルが今日釣つた魚でムニエルを作つてくれるんだとメシにしようぜー！」

そういうことでラインも食事会に誘われることになつた。

そして暖炉のある食堂で和やかにセドリクの帰りを祝う。

「やうやう。ハインリヒのオッサンはセドリク、お前を陸大に通わせるつもつらしこわ。

今日、そんな話になつた

アンスがムニエルを頬張りながら言つ。

「陸軍大学へ？」

「お前は騎兵だからな。しばらくの間は隊付で仕事をしてからになるとは思う」

それに驚いたレオンがフォークを軽く弄んで妹に言つ。

「幼年学校にも通わせてくれなかつたのになんてだらうね？」

レオンとセドリクが目を見合せた。

そこでさりげなく

「叔父上の病状も最近はだいぶ落ち着いている。

セドリクの将来を考えないことではないか？」

ラインがナイフとフォークを置いて話に入った。

「前はリーザの事を避けたりしていたけど、今日なんかは全然そんな感じに見えなかつたよ。

ならいいのだけど

レオンはやう結んだ。

「アルベルのお料理とても美味しかったわ。今日は色々やうもありがとう」

セドリクはアルベルにそう言って喜ばせる一方アンス達には、「フィロソフィアに行くまでのわたしは功に焦っていたから、物事の順序や年相応の事柄をわきまえていなかつたと思う。お父さまが…いや陛下のバラディンとして、学ぶべき事がたくさんあるのなら、それに従おうと思います」と、言つた。

「ありがとうございます」と、言つた。

それを聞いてアンスもはにかみながら語りかける。

「まあ、3年前より父娘関係は良くなつてるとゆづれば。頑張れよな」

セドリクは嬉しそうに微笑んだ。そして今度はティートの顔を見て言った。

「今日は礼拝堂に行つたのに、友達の無事を祈るのを忘れていました」

「では明日お祈りいたしましょう」

ティートも穏やかに微笑む。

「どんな方でしう殿下のお友達なのでしう」

「フ・ア・ディール連邦共和国の海軍少尉でハーディン（ライアンヒードイーの異母兄）の後輩の方です。

彼は任官拒否したかつたようですが、今は南部戦線に出征しておりわたしの友達もとても心配しています」

「さつとお優しい方なのでしょうね」

「はい。とても気のいい方でした」

「むじうでは友達たくさん出来たみたいだね。

ヘンリと仲直りできたって聞いているよ」

レオンもセドリクに話しかける。

「ヘンリのお家からも学校に通ったから、その時仲良くしてもらつたの」

「うん。良かつたじゃないか。

君と一緒に打ちした伯爵も良い人だったみたいで、彼のお祖父さんからあの時のことはもう振り返らないように言われたよ。今も未来も大切な未来ならそうすべきだ」

「フィロソフィアの王様らしいね」

「兄上が診たというバルバラの伯爵ですね」

「ん？ああ…そんな事もあつたな。

あの時は正直駄目かと思つたものだが」

「アーティが？」

「そうだ」

「ラインのおかげだわ。本当にありがとうございます」

「どういたしまして」

ラインはそつけなく返事した。

こうして夜はふけていき終始和やかな雰囲気で翌日を迎えた。

皇帝直属のパラディンとして、また参謀本部付の将校としても覚えなくてはならない事は山ほどあったが、

それも無理なく指導してくれる上官がセドリクの側にいた。

日々は緩やかに平穏に過ぎていき、やがて帝国に併合される国にある湖の塔で行方不明となつた王について

話し合う日が来た。

王、カール11世の父で現国王カール10世とその王子シャルルとその娘ロスヴァイセが南エーデルラントの宮廷を訪れる形をとることになった。

といふのもハインリヒの異母弟ヴィルヘルム公とその子息マクシミリアン王子がかの国での話し合いを済つたからだ。

「我が息子カール11世と南エーデルラント王ヨリウス28世ハインリヒは友達じゃつた」

まずカール10世はそこから話をはじめた。そしてハインリヒが搜索に協力を惜しんでいない事を評価した。

しかし一方で息子のセドリク王子に理解できないともらした。

「愚鈍な皇太子でしたよ。セドリクは」

マクシミリアン王子が素知らぬ顔で言つ。

色々情報を集めていたカール10世は不快感を露わにしてマクシミリアンに話しかける。

「ほう、裏でこそこそと騎士団を動かし従弟のセドリク王子に圧力をかけておいてよく言つ。

「私が従弟の皇太子を脅したとでも？」

「結局異母兄との口論になると思つていた」

「今日は先代ヴィルヘルム帝の名をけがしにきた訳ではないだろう異母弟である大公の同名の父親の名前を出してから、カール10世にはこう言つた。

「結局の所、どうぞれたいのだ、王よ」

カール10世は一段と険しい表情を作る。

「では単刀直入に言おう。セドリク王子を国際法で裁いていただきたい。

うすうす黒幕がいるとは思つておつたが、

セドリク王子も10代の子供とはいえ、我々もこのよつた不祥事を起こす王位継承者についてはいけぬ！！」

カール10世はやりきれなかつた。小国の王という立場が問題を複雑化させた。

「私も自身の皇太子を変えることになつたが、それでも足りぬと？」

「南エーデルラントの王位が残つておる！」

「南エーデルラントの王太子はセドリクの兄であるレオンハルト・ゲールノートだつたが、

息子が従軍神父になつた時に、再びセドリクが浮上した。
どうしたものか…」

「聞けばセドリク王子を皇帝直属の聖騎士としたそつじゃが。軍を辞めていただきたいと思つておる！」

「私の直属ならば、あのような不祥事は一度ないと思つたのだが、ご不満か。

再教育は徹底する。しつかりと

そこでルルは組んでいた腕を動かしてセドリクに訊いた。

「そんなに軍人になりたかつたの？セドリク王子は」

「皇帝陛下のお側に置いていただけたらと、ですがわたしも兵役中の身です。逃れるわけにはまいりません」

「兵役ねえ…確かに王子が以前のように留学を理由に兵役を逃れた民に示しはつかないね。

まあ、セドリク王子は軍のエフートで、エフートコースに乗つているのは

正直に言つてこいつは見ていて面白くないということだけど、

…あんな事さえなればこんな事言わなくてすむのにね。こいつ思つことも無かつたのにね」

ルルは一応セドリクを気遣つてはいた。

「多額の金品ももらつてゐるから私は様子見だけど…」

「先代のヴィルヘルム帝の時代では、

『ごほつ！』

「こんな事は…！」

「おじいちゃん大丈夫？」

ルルが祖父を気遣つた。

「わしも長くはない。気がかりな」とばかりじや…」

心は女性かもしれないが自分の孫であるルルに背中を撫でられて、カール10世は本音を言った。

「セドリクの兵役中はそちらの言い分は出来る限り考慮するということでしょうか？」

ハインリヒがそう言つて心配そうに声をかけた。

「こちらも武富をエーテルラントの宮廷にて新たに置かせていただくがままわんかね？」

「もちろん構いませんよ。連絡は密にしてよ」

ハインリヒは皇帝としてではなく同じ王として年上の王を敬つて返答した。

「それと真相解明を急いでくれ」

ハインリヒは無言で頷いた。それはハインリヒも知りたかったのだ。

幼いロスヴァイセは庭の噴水の前を行ったり来たりして遊んで待っていた。

毎日噴水の前でヴァイオリンを弾いているアルベルは猫耳の少女を見て楽器を弾く手を緩めた。

「なにして遊んでるの？」

アルベルは腰を落とすと優しげに話しかけた。

ロスヴァイセは振り向くと人懐っこさうに返事した。

「噴水で遊んでいる！」

ママとグラントパを待っているのよ」

「ママとおじいさんを。見かけないけど王宮は初めて？」

「うん。今日は王様と王子様とお話しするんだって。

それとね。エーデルランナーに来るのは初めてよ。

お庭を見ていていって言われたから、見せてもらひているの

「王子様？」

セドリック王子様かな？皇太子だった。

お城だけあつて庭も綺麗でしょ」

「やうセドリックくん。昔、私の国に軍隊を入れた…」

「軍隊…」

「私、ちっちゃかったけどルルママのパパが居なくなつたからそれは覚えてる」

「ああ、わかった！」

ルルママってシャルル王子のことだね。お城のバーを新しくした
猫耳の少女と話をする一方でアルベルはセドリクが責められてはい
ないかとても心配した。

「うん。ルルママはバーで働いているのよ」

隣の国にフェルプールのお姫さまなんていったかな？と思いながら、
アルベルは思った。

「お城のバーでボクも演奏したことがあるよ。
楽しいよね」

ロスヴァイセは複雑な事情を知らないしました気にしないでいたので、
あんな事があつた後でも明るく笑っていた。
ただママのパパとまた遊べたらいいなとは思いつつ。

噴水の前で金髪の美少年と話をしている姿を見つけたルルはロスヴ
アイセ達に声をかけるために近寄った。

「ルルママー」
「シャルル王子ー！」

「待たせたね～。

えーと……リーブルヴィル伯爵のお子さんだけ。ヘルムホルト家の
名前は……

「はい。アルベルです。

貴、セドリク様と一緒に伺つたことがあります。

あの時は非武装地帯に騎士団を入れることになり、申し訳ありませんでした。

あの時、皇太子殿下は一刻も早くコリウス陛下にお知らせしなくてはならなかつたのです」「アルベルはセドリクの分も頭を下げて謝つた。

「ああ、それね。

セドリク王子も反省しているみたいだしね。

同時に父が賊に襲撃を受けて失踪したのはまた別の理由があつたと思つているわ。

あの時のセドリク王子もあなたも間の悪いときに来たのね

「本当にすみませんでした……」

「仕方がないなあ。あんまりクヨクヨしないことね。
お互いの国の将来を考えてくれるなつなおやつのことよ。
それにしても若いわね。今いくつ?」

「あ……はい……セドリク様と同い年で一八歳になりました」

「ねー。ルルママ、お話をうだつた?
楽しかつた?」

「ん~… そうねーなかなか有意義だつたわよ~。

セドリク王子もあなたも若いんだからもつと前向きに考えてねー
服の裾をひっぱる養子の娘とアルベル、ルルは同時に一人に話しかけた。

「はい。セドリク様も悩まれることが多いので伝えておきます」
アルベルが硬くなつた表情を崩して言った。

「ルルママ、これからどうするの?」

「ああ、どうしようかな…お城の中でも見させてもらひつ。
それともお庭見学をさせてもらひうつかなー?」

「良かつたら、案内させてくださいね
いいねー。お願いしちゃおうかなー」

「ルルママーおなかすいたー」

「じゃあ、食堂でも案内しましようか?
「すまないわねえ。お願いできる?」

「はーー喜んでー!」

そういうことで一行は食堂に足を運んだ。

「ライインさん!」

なんと食堂ではライインとルフレヒトが料理がでてくるのを待つていた。

「あら、ライイン王子おひこじゅうひー!」

「うん?アルベルか。

それと……

アルベルの後ろからやつてきたルルと幼い少女を見て
「シャルル王子、」と無沙汰しています。

そちらの子は……？」と挨拶をした。

「私、ロスヴァイセ！」

「はじめましてロスヴァイセちゃん。

私はルプレヒト。お城の医者です。

こちらはラインハルト・テオドリヒ皇太子殿下で、みんなはライン
って呼んでいます。

よろしくね

「うん、ルプレヒトくんとラインくん よろしくね！

私達ごはんたべにきたのー！」

ロスヴァイセが楽しそうに笑った。

「うむ、腹が減つては戦はできんからな。たらふく食つてこくと良
い」

「うん！何がでてくるか楽しみー

椅子に腰掛け足を揺らすロスヴァイセの愛らしい姿にルプレヒト
は思わず微笑んだ。

「落ち着きのない子でねー」

つられてルルも笑う。

するとそこにはアンスがやつてきてラインのそばに来ると折り紙で折
られた紙切れを渡した。それから

「「Jさんにかけ」」と何事もないかのように挨拶した。

ラインは渡された折り紙を開いて書かれた文章を読むと吹いた。

「どうしたのー「ラインくん?」

「ラインはしばらく考えてから

「ああ……うちににもオカマ王子がいるんだが、そいつの配属…仕事場がオレは変だと思ったのだ」と返答した。

「馬鹿かー!こんな所でばらす奴があるか!」

アンスはラインをこづいた。

「ラインさん、セドリク様がどつかしたんですか?

アンス、どういう事?」

アンスの従弟のアルベルが2人にわけを聞いた。

「ああ、オレはオレと同じで隊付だと思っていたんだけどなー。違つてさ」

アンスは少し残念そう。

「ああ、そうだな……例えるとだな…田立つてはいけない所に王子が配属された」

「?」

「なぞなぞー難しいのー…」

ロスヴァイセが可笑しそうに笑っているので、ルルは黙つていることにした。

「田立つてはいけない所？」
アルベルが首を傾げる。

「このなぞなぞ難しいよねえ」

ルプレヒトがロズヴァイセに言ひ。

「うん！ 考えるー」

ルプレヒトは微笑ましく思つた。

シャルル王子の国とは近年関係がうまくいっていなかつたが、何も知らない子供がいると不思議と和むのだ。

こういった子供達の為にも未来は明るくしていかなくてはならない
と思つ。

「田立つてはいけないって、セドリク様みたいに剣技に秀でたお方
は田立つと思うのですが……
ええと……ビードラウ？？？」

もどかしくなつてラインはアルベルに折り紙を渡した。

紙には『参謀本部付』と走り書きがしてあつた。

「す」「こじやないですかー！」

「凄い以前にマークされてしまつては意味がないと思うがな。
昔から言つだらう参謀の無名性を…
ビードラウになつたのか疑問だ」

「なら君が殿下を補佐してさしあげれば？」
ルプレヒトが何となく答えを察知してラインに微笑みかける。

「ふむ…君主は大元帥、未来の総司令官で戦場の指揮官に育ててい
くつもりなのだろうか」

ラインは少し考える。

「難しく考えるほどのことでもないと思ひナビなあ」

「なぞなぞ答えわかつたの？アルベルくん」

アルベルはそれにはかなり困った様子で答えを出した。

「それがね…平和的じゃないねえ…」

ボクの従兄のファレンティーン王子は兵隊さんだから、そもそも平
和的じやないんだけど…」「うーんと唸つたままだ。

「戦争はいけないよ。ホントに死んじゃつたりするんだよ。
ルルママのパパもいなくなつちゃつた……」

「……すまん」

アンスが場の空気を察してロスヴァイセに謝つた。

「さてと…食べるぞー！

ロスヴァイセ、フォークの準備だ」

そう言つてロスヴァイセの背中をルルが押す。

「じゃあボクはシェフに頼んできますね。

ロスヴァイセちゃんは何か食べたいものある？

「お子さまランチー！」

「かしこまりました」

そう言つて厨房に向かつ。

「えつと、あなたのお仕事つて何時まであるの?
アンスは急に仕事をことを聞かれた。

「普段は毎日夜の7時まで、時々夜半まで。

夜勤の日もあるけど朝から働くときはたいてい7時までかな」

「おなかすかない?」

「すべ、すべ!」

「じゃあいつぱい食べるといいわよ」

天使のように笑つた。

「平和だな」

「平和が一番だよ」

ルフレヒトが笑つて言つ。

しづらしくして食卓に料理が運ばれてきて楽しい食事会が始まった。

銀の食器に色とりどりの果物が並べられ、サラダやローストビーフ、スープなどが食卓を所狭しと賑わした。

「ワラーも忙しかつだ。」

食後にアルベルがヴァイオリンを弾いて華をそえた。
吟遊詩人みたいに弾き語りが出来たら良いけどねと照れながら。

「上手ねー！バーで雇いたいくらいだわ」

ルルはそんなことを言う。

「いつか殿下のバーでも演奏させてくださいね」

アルベルがそんな思いもしないことを言つたのでルルは嬉しくなつた。

「友好の架け橋になつてくれるのね～」

「私も呑みに行つてもいいですか？」

ルプレヒトもルルに尋ねる。

「おいでおいで！」

「みんなでおいで」

楽しい食事会だった。

アルベルは今日の日記をつけるのが楽しみだった。

ルルがいればきっと円満にいくと思つた。

「…フィールド・バリアってあつたじゃないか。」

いつもと変わらない夜、白夜でまだ外は明るいが、アンスは仕事帰りのセドリクを捕まえると、そう話し始めた。

「ああ…およそ300年前に出来たという魔法の壁　光大洋と影大洋を隔てる障壁のこと?」

「それ。で、オレ達は自由に行き来出来なかつたのに何故、急に魔法の壁が晴れちゃつたんだろうな?」

それでフィロソフィア軍でもフィールド・バリアについて研究されていたと聞いた。

それで、向こうにホームステイしていて何か知つた事つてあるかい?

「…急に晴れたってハーディンは言つていたけど…詳しきは知らない」

「そつかあー」

「何か、気になるなら、手紙でも書く?」

ハーディンもヘンリも戦場だけど、郵便は届くみたいだから。」

「そうだな。

こちりでも、あの一件以来、海軍と空軍がフィールド・バリアが作った海域を観測しているが、不明な点ばかりなんだと。」

「フィールド・バリアが無くなつて戦争になつたからね。」

あれには参ったねえ……

セドリクの寝室の前に立って、ドアを開けた。

「立ち話もなんだし、中に入る?」

「いや、いい

「何か疲れてるみたいだけど、今まで軍のフィールド・バリア研究に深くかかわった?」

「まあ、それなりに。」

「さうか。で、フィロソフィア軍の研究が気になつたのか。」

「…それだけじゃないんだけどなー。」

セドリクが首を傾げた。

「まあ、君は幼なじみだし、一緒に士官学校にも通つた仲だけど、あの戦争から、お互いの任務は変わつたよね。

竜騎士だった君は今は軍のパイロットだし、僕は時代遅れの騎兵で、参謀本部に配属された。

戦争でお互い家族を亡へしたから、君はそれを引きずつてない?」

「…お前の母ちやんの墓参りとか行つてるか?」

「」の前の口曜にやつとだけどね。レオンとお父をまとひつた。

本当に帰国してすぐ行くべきだったね。

アンスは？

「ついひの親父の墓は、ノルトラントだから、あまり行つてない。」

「君の故郷はここからはちょっと遠いからね。帝都勤めではなかなか帰れないか。」

「ああ」

「まあ、今度時間を作つうと思つぜ。じゃあまた明日な。」

「またね」

アンスは掌をひらひらと搔いてそのままへたと帰つた。

翌日、ルプレヒトはセドックのもとを訪ねると挨拶もなしに即ち用件を切り出した。

「…………」

しかしセドックは途端に重い表情を前面に出した。

「おそれながらお聞きしますが、非武装地帯にあなたは何故武装したまま馬を進めたのですか？」

そうしてまでも御父上に伝えなくてはならなかつた原因はいつたい……私には皆田見当もつきません。」

ルプレヒトは胸中のもやもやを思い切つて伝えたようとした。

「…………わたくしからその事について話すことは出来ない」

「侍医の私にもですか？」

あなたには頗くしきたつもりです。信用してお話をださい」

「……お祖父さまと約束したことがある。その内容は父である陛下にお話しできないことだ……」

「御祖父様と申されますと……先代……、それとも天帝猊下でしょうか？」

「陛下の父上にあたる……先代の皇帝陛下ですよ。

固い約束故、選帝侯にも話すことは出来ません」

「では、非武装地帯の事は致し方ないことだったと……」

「他にも手だてはあつたと思つし、
わたしが未熟故おこつたことだ。

そなたには本当に申し訳ないことをした。」

セドリクはそういうつォーデルバイ帝侯の子息に頭を下げた。

「セドリク様、どうかお一人でお悩みになられませんよう」

「いや、事情が事情ゆえ相談しにくいのですよ。

わたしから情報を漏らして良いものか……」

セドリクなりに悩んで言葉を詰ませた。

ルプレヒトはそんなセドリクを心配に思つ。

冒険はまだまだ続く

まだまだお話は続きますが、ひとまずこの辺で区切りたいと思いま
す。

第3部第2章は次回へのおまけみたいな感じです。

以上までお読みくださつありがとうございました。

【訂正箇所】

以下、設定上の誤植のようつです。

×ゴリウス27世（一部では23世バージョンもありました）ハイ
ンリヒ
ゴリウス28世ハインリヒ

古い記録によるとハーディンはジークフリート9世の設定があるの
で、父王ジークフリート25世は正しくはジークフリート7世の筈

謹んで訂正をお詫びいたします。

写本A版（前書き）

EIN GLANZ写本A版

（きはねせりな／著）

作品番号／592477

ジャンル／ファンタジー

最終更新日／2011／5／23

オリジナル小説写本A版

写本A版

序章 虹色の雪

虹色の雪

いと高き天から雲がぼたり。
大いなる恵み。

天使の光がきらきらと反射して結晶をつくつた。
秋植えの植物がちらほら芽吹く……。
…………。風が光をはこぶ。

「リーザ」

ボクはそつとよびかける。

「リーザ。」

吐く息は冷たい。

ただ、ただ、幻想的なまでに、
ただ、ただ、家庭的までに。
言葉を失うほど朝の光景。
そして、庭の美しさ。

朝露に濡れた秋の花。
じきに雪が降る。

ほんのり紅をさしたグリーンアイスのような光彩を残して。
ユリウス23世ハインリヒは目を覚ます。

気が付けば朝。人払いをした執務室で寝てしまったようだ。
あの夢は何だったのだろうと考えたのだが、あまりゆっくり考えて
いる余裕のない自分が少し悲しかった。

セドリク・エリーザベトの父親として立派に振る舞おうと心がけて
はいたが、近年は冷たく接してしまいかだ。

あれが小さい頃は家族サービスにつとめていたのだが、最近はそれ
もままならないせわしなさと国内の政情不安。

いつのころからか、気が付けば厳格な父となっていた。

娘には強く生きて欲しいと願つたからだつた。

子供は双子で産まれてきた。

男の子と、両性で産まれてきた子。

先に王妃が産んだ子は元気な男の子だつたのだが、一人目の子は先天性障害児だつたので手術をしなければならなかつた。

とても健気に生きているように想えた。

政情不安に悩む皇帝の子供として産まれなければ、もつと幸せだつたであろう。

それが不憫でならなかつた。

政情不安による政争で、生後間もない息子のレオンを誘拐されてしまい、行方が知れないので。

腹違いの妹は自分が修道院から迎えた子にその名を『与える』ことについた。

修道院がこのことを忘れないように、この子を愛すること。

港街ルーヴィルの大公夫妻は幼いレオンを抱えてよくハイインリヒの元を訪ねていた。

公子のレオンは双子の妹は仲良く暮らしていた。

本物の兄妹の様に。

妹が育てている子供こそが皇帝夫妻もルーヴィルの大公夫妻も誘拐事件で手放した子供だと知らずに育てることになつたのだった。

実は機転をきかした北の盟主、ノルトラントの大公（アンスの祖父）が、その子をすりかえたのだったが、

その子の安全を願い、事実は伏せられることになつた。

こういう複雑な経緯から、王妃の祖父からの意見で、残された妹は兄の分も期待されて、王子として男子同然に育てられることになつた。

ハイインリヒはこれあまり快く思わなかつた。

この子に王位を継がせたくなかつたからだ。

もっと普通の人生を送つて欲しいと想う。

こうして両親から愛されて育つたセドリク王子は何不自由のない子

供時代を過ごすことになった。

ハインリヒは眠る時間も惜しんで、家族サービスに努めていた。

たとえ田の下にクマができることになつても。

黙つていれば知的な黒髪のイケメンなのに。

その姿は哀れ親バカの域で時々愛する妻にも呆れられていたのだが、子供うけは良かつたようだ。

こうして黒髪のイケメンと淡い金髪の愛娘は実は親子じゃないなどと囁かれて育つた。

「最近、お父さまが冷たいの。アルベル

「え、何？リーザ」

「お父さまが冷たいの。それと、わたしに弟が出来たのよ。」

「そのオカマのような喋り方、何とかならないのか？」

ハードゲイなのかお前は。

アルベルの従兄のアンスがデリカシーの欠ける突っ込みを入れる。「ハードゲイで王子、退廃的だな。この国の政情不安をこの上なく妙に表現している。

あれだ、弟を正式な王位継承者にしようという、叔父上の考えの現れの一端なのではないか？

第一お前が君主？

ハア？」

「ラインさん！」

アルベルが言いたい放題の主君に突っ込みを入れる。

「ラインの言う通り弟が出来たから急に冷たくなったのかも知れない。」

ラインを割りと慕っている雰囲気のセドリクの顔が曇つた。

「もしそうなら、酷い話だ！直訴しよう。」

アルベルがセドリクの味方をするのだが、いまいち要領が良くない。セドリクはただ、小さく溜め息をするばかりだった。

「弟の方が完璧な男の子で産まってきたら、負けてしまうかもしないな……。」

「リーザ、ちよつと冗談だつて。落ち着こいづね?」

従兄のレオンが心配そうに実の妹を見つめる。

「弟ができたのは嬉しいのだけど…」

おとなげない事を恥じる様子もなく言つセドリクはファザコンだつたのです。

弟に父親をとられたような気分になるとは、だだをこねる駄目なひとのように見えたのでした。

「泣きたかつたら泣いても良いのですよ?」

またラインがセドリクをおけょくゐ。

「ライン!」

レオンがラインを制止する。

「甘やかしすぎなんだつて。面白いオッサンだけどな。」

アンスが横やりを入れる。

「コントじやあるまいし、国家元首が面白いオッサンなんて言われていいのだろうか。

最近の父は厳しい。昔は優しかつたけれど、威厳が必要だからかもしれないが…面白くないな。」

「面白いオッサンの方がいい」

セドリクが矛盾したことを言つてゐるので、アンスは素直に思つている事を言つた。

「お兄さんになるつてどんな感じ?」

セドリクが兄と弟両方持つてゐるラインに聞いた。

「オレはファザコンじやないからな。嬉しいが、別に、人それぞれでいいんじやないかな?」

ラインが余裕の無い感じのセドリクに対して遠慮がちに言つ。

「多分もつと歳が近ければ嬉しかつたんじやない?」

君は今色々抱えてゐるみたいだからね。」

「思春期つてやつだな」

レオンとアンスも親身になつて答えてくれた。

「僕は君を兄弟のように思つてゐるよ。」

レオンがそうつけ加えた。

セドリクは途端に嬉しそうに笑顔を輝かせた。

今までの周囲を覆っていた重く暗い雰囲気が嘘のように晴れたようになつた。

「やはり兄がいると嬉しいものだな。頑張るよ」

レオンに励まされ機嫌を直したセドリクだった。

めでたしめでたし。

そんな年頃の子供の心配をよそにハインリヒは新しく迎えた養子に家業を継がせようとしていた。

彼はどうしてもセドリク・エリーザベトを政治家に育てたくないのだった。

平和な人生を送つて欲しいと心から願つていた。

娘が時折外交問題に興味を示したりするのだが、子供の好奇心の芽を摘まない様にするだけで、あまり父親から進んで教えようとしなかつた。

セドリクはそんな父の姿勢を敏感に感じとったのか、父親に頼らず、自分から進んで学ぶようになった。

ハインリヒはそんな娘を見て、最終的には娘の意志に任せようと考え直した。

血筋とは恐ろしいな…。

一抹の不安を抱きながら。

よりよい国づくりを目指して頑張つている娘を見ながら、いやとなれば亡命させなければならぬ国内外の情勢にハインリヒが頭を悩ませていた。

「あなた、無理をばかりしては駄目ですよ。」

王家出身の王妃が夫を心配するのも無理はなかつた。

共和主義者の夫が国内外の貴族から反感を買つことがあるだけにおさら心配だつた。

何とか息子のユリアンが成長する息子の代には社会福祉制度の発達

した共和国として安定した世の中になるよう土台を築いてやりたかったのだが。

だが、セドリクには一所懸命に働いている父が誇らしかったのだ。この国の為に働きたい。

心からそう想つた。

娘が士官学校に進学したいと言い出したのでハインリヒは手にしていた本を落とした。

どうやら娘は軍人は市民の代表のように思つていていたようだ。政治家を志すためにも軍務に就いておきたいというのが娘の主張だつた。

心優しい文学少女のように育つて欲しいと思っていたハインリヒだつたが、いつしかフェンシングのサーべルや乗馬が得意な、現実的な娘に育つていた。

現実的なのは、早く父親の役に立ちたかったからだろうか。両手持ちの大太刀を手に防衛について語る娘、父は深い溜め息をつくと、明確に反対した。

「ですが、皇帝陛下のお役に立てます」

娘のセドリク・エリーザベトがそう言つ。

父ハインリヒの言葉が余程心外だったようだ。

一体娘は私の何処を見ていたのだろう。

ユリウス23世ハインリヒは自らを振り返ると共に娘の将来が不安で仕方がなかつた。

ハインリヒは自身を厳しく戒めると、無理に厳格な父を演じていた事や、気が付けば娘を厳しく育てていた事を激しく後悔した。もつとのびのびと平和を愛する健やかな子に育つて欲しい、ハインリヒは今までの子育てを今一度見直すこととした。

なにしろ彼は養子で自分の後継者であるユリアンの子育てに失敗は許されないと考えていただけに娘の進学先に神経をとがらせた。セドリクもファザコンなのだが、早く父の役に立ちたいと、いつから功を焦るようになつた。

結局、母方の父、天帝カリクトウス（ラインの祖父）の影響力を後ろ盾になかば強引に士官学校に進学した。

そもそも障害を持つ娘を王子に育てるよりつてきた教会の長にて、ハインリヒは公然と反発出来なかつた。

娘がバッティングされる原因は出来るだけ作りたくなかったのだが、この皇帝と教皇の関係は周囲から奇異に見えた。

「皇帝陛下と教皇猊下、お2人の関係つて重いわよね。セドリク様の教育方針で揉めているって話よ。

オカマ王子と言われていらっしゃるからね。

神学校に通うという話もあつたそうよ」

メイドが気にくわないひそひそ話をしていたので、アルベルは不渝快な顔をした。

アルベルはアルベルで王妃の実家に代々仕える身だったからだ。セドリクの従兄にあたるラインが彼の主君である。

そういう気分なのか、ここ最近は重々しいヴァイオリンの曲を演奏するばかり。

「何でボクの主君はラインさんなんだろ?...
ラインさんの叔母様にあたる王妃様の子供のリーザなら良かつたのに」

伯爵の長男の贅沢だが後にメロドラマになるような深刻な悩み事だつた。

「不安だ。」

ハインリヒは娘が年々遅しくなつていく姿を見ながら、不安な日々を過ごしていた。

「心配しなくとも、あの子は優秀ですから大丈夫ですよ。
文武両道だなんて凄いじゃない」

ハインリヒが悩んでいると傍らにはいつも王妃のテレーゼの姿があり、彼を優しく慰めるのだった。

* 第1部第1章*

セドリクは同じく士官学校に進学した友達のレオンやアンスと一緒に騎士になるべく日々精進し、共に学校生活を送るようになった。やがて任官し、セドリクは王宮付けの騎士となつた。

父王の補佐がつとまる日を夢見つづ…。

政情不安といつても、その後ハインリヒは事実この国をよく治めており、

歴代の君主も百年前に内紛があつたものの、対外的に三百年間戦争の無い平和な治世となつていた。

彼女は川が氾濫した時に川に行つて復旧作業をしたり、冬の除雪作業や土木作業に従事して過ごしていた。

「平和だな。良いことです。」

「殿下、午後のお茶は何にしますか？」

宫廷音楽家の卵のアルベルがセドリクに尋ねる。

アルベルも兵役で軍楽隊に所属していたので、一緒に過ごす機会も多かつた。

午後はセドリクが紅茶の銘柄を指定して、アルベルがケーキやお菓子を作るのが定番になつていた。

「アルベルの作るお菓子は絶品だね。パティシエになれるよ。」

「いいえとんでもない。うちのパティシエに教えてもらつてばかりです。」

まだまだ修行中で…」

彼は謙遜するが、大好きなセドリクに褒められて上機嫌だった。

「しかし、皇帝陛下のお側で働くには、あと何年こうして修行しないといけないのかな。」

「そうですね。自力で頑張っていますものね。」

「この間の面接の通知は不採用だったよ。」

「わざと遠ざけているんじや……」

「わざと?」

「とにかく君は何も心配しなくて良いからね。宫廷ヴァイオリー

ストの父に一度聞いてみるよ。」

「自由都市の伯爵閣下か。」

「IJの生活水準から発信しているのだから、やうやく適齢期だとは想つんだ。」

セドリクもたまにはアルベルに頼つてみることにした。

「お父さま同士の付き合いで色々あるのかしら。」

「ボクのパパも幼い頃から宫廷にいるから、何かの役に立てると良いなあ。」

一方コリウス23世ハインリヒの元には初老の将軍が訪れていた。

「セドリク王子ですが…将来が楽しみですな。」

皇帝陛下の片腕として働く日も近いです。」

「いや、私は子供が軍隊で働く事に強く反対したのだ。」

おとなしく将軍に護られていれば良いものを、何か迷惑をかけてはいないかとヒヤヒヤしている。

私の言つことを聞かなくて困つてているよ。」

ハインリヒが溜め息混じりに悩みを打ち明ける。

「そんな風には見えませんが、（父親思いに見えた。）

殿下も年頃で色々思う所があるのかも知れませんな。」

「そうか。なかなか思つようにはいかないものだ。」

セドリクが近衛兵に志願してからといつもの（とは言つても彼は自分の王子を門前払いにしたのだが）、皇帝である父親の頭痛の種は更に増えるばかりであった。

それは例えるならば、常口頃自分も近衛兵に護られながら父親の身邊を護つても「うとう」との難しさであった。（矛盾しているから）

娘の自立に対する配慮もしたりと、おみそ皇帝らしかぬ苦労が続いた。

「子供の考えている」と訳がわからん

ハインリヒは頭を抱えて悩みに悩んだ。

いつしか口癖になつていてるのだから、ハインリヒがどれほど悩んだ

か窺い知れるくらいだつた。

所で、近衛隊にセドリクと一緒に志願した少年がいた。レオンである。

彼は見事合格したのだ。ハインリヒが悩んだ分、遅れたが合格通知が彼の元に届く。

「色々探つてみるよ」

彼は頬杖をかけて呆然としていたセドリクを優しく慰めた。

「それと君を守ることになつたからよろしくね！殿下」

この知らせはアンスの祖父の耳に入ることになり、彼は大変複雑な心境だつた。

セドリクが望むなら我が国の近衛隊に迎えるよう取り計らつた。つまりアンスの祖父はセドリクを彼の国の近衛隊に招致して技術を授けるよう手配してくれたのだった。

誘拐されたレオンを単独で救い出し、2人が実の兄妹だと知つていた元大公の判断だつた。

「あいつ大丈夫かな」

ラインは遠巻きに呆れつつもセドリクを心配していたのだが。

こうして別々にだが2人は自衛に必要な技術を得ることができた。2人が訓練を重ねる姿を見て、ハインリヒは隠居したノルトランントの大公に気を遣わせてしまつたことに気付くと、自らの醜態を強く恥じるのだった。

「伯父上までセドリクを甘やかしすぎだ。放つておけば良いと思つ。そのうち頭も冷えて冷静さを取り戻すだらう。」

宫廷医であるフォーデルヴァイデ侯の元で医学を学んでいたラインは呆れ氣味に

侯爵の息子のルプレヒトにそう言つとセドリクをきつく見据えた。

「でもノルトランントの大公殿下の適切な配慮のおかげで円満に解決したそだから良かつたじゃない。」

ルプレヒトがにこりと優雅に笑みをたたえる。

「しかし王子が近衛兵に憧れるとは…。」

「それだけど、お父上を余程尊敬していないと憧れないと思つよ?」

「…………」

2人は同時に天を仰いだ。

「お互い尊敬できる父親が欲しいものだな。」

「視線が重なりルプレヒトがはにかむ。」

「教皇猊下、君のお祖父様の方からはどうなの?」

その後細かく言われてはいないかい?

セドリク殿下、騎士とは言つても修道士でもあるからね。厳しい人生だね。」

「聖職者になるように。」

「ああ、やつぱり。私も今の内に身の振り方を考えておいた方が良さそうだ。」

「うちの爺さんは相変わらず口煩い。何度も部屋に閉じ込められたことが。」

「天帝猊下もそれだけ孫の君に期待しているんだろ?けど自宅軟禁はちょっと酷いね。」

「意にそわぬ事をして部屋に閉じ込められても窓から抜け出すがなラインがやりと笑つた。

「君はお祖父様とは不仲だが、セドリク殿下は仲が良い。同じ孫なのにこの差は一体何なのだろうね。」

「そうだな。セドリクは先代皇帝にも気に入られていた。

扱いが違うのはオレが反抗的だからだろ?」

「でもセドリク殿下には君やアンセルム^{アンス}王子や皇帝陛下の様な民衆からの支持がない。これは問題だよ。

人柄も良いのが裏目に出ているのかな。意外に政敵が多い。考えておいた方がいい。畏れ多い事が殿^{テウ}下は政治家には向いていないよ。」

「…………。」

「大貴族のお気に入りだから嫉妬もあるのだろうけど、もつと民衆と共にあるべきだ。」

所で結婚相手は一体誰なのだろう……。」

「……結婚……」

「アンスとか……サミニディアの王子とか……」

「……本当はお姫様だなんて民衆もなかなか受け入れられない。」

「両性で産まれてきたものは仕方がない。」

セドリクは障害児だ。」

「私達、医者には理解できるが、彼女が次の皇帝に選出されるとは……想えないよ。そんなに甘くない。」

「祖父はあれが天使だと、だから男として育てるように言っていた本人だけの責任ではない。」

「それは皇太子としてじゃない。それは教会の為に尽せという事だ。」

「彼女は騎士であり修道士だ。女性には厳しすぎる人生を自ら選んだ。」

「貴族の支持も欠かせない。大衆の支持も欠かせない。今に失脚するよ……。」

いつしかルプレヒトの目に涙が浮かんでいた。

「父は宮廷医として、ずっとこの問題に向き合つてきただけれど、殿下も成長期に入つてそのうち隠しきれなくなる。」

いいかい、コリウス陛下はセドリク殿下を外国にて亡命をせん気だつた。

出生当時は政情不安だつたからね。

産まれた時から後継者にするつもりはなかつたのだ!」

「まさか……」

「私の祖父が後見人を……書類もある」

そう言うとルプレヒトは書類を紐といた。

「後継者は弟のユリアン殿下だと想つよ。」

「……ユリアン……」

「兄弟で継承争いが起きると想つ?」

「……セドリクの夢は父親の役に立てる」とだ。

家名を汚すような事はしないだろう。

「コリアン＝フリードリヒは幼なすぎて、何とも……言えないな」書類に目を通しながら、ラインは平静を保ちつつそう答えた。

「セドリク殿下は教会の為に生きているようなものだ……騎士の誇りをもって生きていいくのか。これから……」

「オレとは正反対だ。」

ラインがループレヒトに書類を返しながら言った。

ラインとループレヒトの2人が国の将来を憂いていた頃、海を挟んで遠く離れた国では一度政変が起こっていた。

800年続くハワード家の庭園はエデンの園を彷彿させるほど美しく色とりどりの花が咲き誇っていた。

薔薇、クレマチス、異国から送られた花菖蒲、池には錦鯉が悠々と泳いでいる。

ハワード邸に住むヘンリイは薔薇の手入れをしている腹違いの兄にある日こういった。

「王制も倒れた。

士官学校に行つて、國の為に働く。兄貴の為だ。」

「私の為?」

私はお前を失いたくない。何もこんな時世に軍人にならなくていい。

「アーサー・Ｋ・ハワード伯爵は、弟のヘンリイを必死に止めた。

「両親は死んだが……オレは兄貴とは違う。貴族でもない。いつまでも兄貴の世話をにもなれないしな。」

ヘンリイの決意は固かつた。荷物をまとめてさっさとバスに乗つてしまつ。

アーサーもヘンリイを追つて車に行つた。

それほど家族を失いたくなかったのだ。何としても引き留めておきたかった。

別居しているアーサーの母マティルダ王女の元に連絡が入る。彼女は將軍から報告を受けると首を傾げた。

「ヘンリと…」

どうもマティルダはヘンリが苦手だった。

離婚した夫の再婚相手の連れ子ということもあったのだが。「アーサーに気を付けるようにいいなさい。ハワード家にも困ったものですね。」

彼女にしてみれば父、つまりアーサーの祖父が他国に囚われの身になつたので、今はヘンリの家出事件に構つていて余裕はなかつた。アーサーの祖父は会談に赴いた所を隣国の独裁者に捕われてしまつたのだった。

特殊部隊により幾度となく救出作戦が繰り広げられたが、未だ成功していない。

もちろんヘンリもそれを知つていて志願しに行つたようなものだつた。

そんな囚われのアーサーの祖父に拾われて育てられた陸軍士官がいた。名をステイブルストン中尉という。

彼は任官してからというもの育ての親を救うべく奮闘していた。あるとき若い部隊を任せられる事になつた。

「閣下」

ステイブルストン中尉が尋ねると、幼い頃面倒をみてもらった老将軍は親しげに喋り出した。

「士官候補生ばかりだが、君の指揮下に置くことにした。

今回は海を越えて光大洋の隣国へ行つてもらいたい。

新型の潜水艦で海を渡れることが判明した

「偵察任務ですね」

「そうだ。期待している。」

こうしてステイブルストン中尉は任務に就くことになつた。

一方母国ローゼルツの領地で名君の誉れ高いリー・ヴェ侯の娘ユリアナはある日不穏な動きを察知することになつた。

皇太子への反乱。

最初それは書状だったのだが、帝室の抱える複雑な事情を知るリー

ヴォー侯は半ばそれを黙認しようとしていた。

地下の会議室を通り掛かつた娘が立ち会っていたのは偶然であったが……。

正直、ユリアナにはどちらでも良かった。反乱は現実味を欠いていたし、セドリクなら切り抜けられるとも信じてもいた。

ただ、幼なじみのラインに知らせた方が良いと判断した。

折りを見て帝都に向かおう。

表向きは平静を保つて帝都に向かうきづかけを伺っていた。

南エーデルラント王国にある帝都ローゼンでは君主が頭を悩ませていた。

どうも最近感情的で良くない。昔とは人が変わったようにセドリクに接してしまう。

明らかにハインリヒは感情をセーブできなくなっていた。
異常性に気付いたフォードルバイ、デ侯は孫のループレヒトにそっと打ち明けた。

「ユリウス陛下がですか？」

ループレヒトがまたかといった表情で祖父を見る。

「私は陛下の侍医として見過ごすことはできません。ルー、万一の時はセドリク様を頼んだぞ。

私も持病を抱えてはもう先は長くはない。この国の行く末だけが心配じゃ。」

「心得てあります、御祖父様。ですが、何故、セドリク様だけにこのような態度を取られるのでしょうか。弟のユリアン様との扱いはまるで違う……」

「これは精神疾患ではないのだ。何か異質なチカラで遠ざけておられる。ユリウス陛下はセドリク様を後継者として認めたくないあまりに

心のたがが外れたようにならせられた。人の心に魔が棲んである。」

「御祖父様らしくありません。いつたいどうされたのか……」

ルプレヒトは非科学的な祖父の言動に呆れた。

「そんな目で私を見ないでおくれルー。」

「すみません御祖父様。ですが、仮に先程の話、ユリアン様を後継者にされるのであれば、大貴族の支持を失うことになるのではないでしょうか。」

国内外の有力な諸侯から愛されているセドリク様をむやみに皇太子の座から追うとなると、普通は反対されます。

確かにセドリク殿下は今は女のお子様でそれを隠されておりますが、そう決められたのは陛下なのではなかつたのですか？」

「だが現実には追放しようとなさつておられるよ。むろん理論的にではない。このままでは王位を巡つて兄弟喧嘩にならないか不安で仕方がない。はては皇帝の座を争うかも知れぬ。」

「…………では、万一件があるば私がセドリク殿下にお仕えします。そうならないよう努力いたします。それでいいですね？」

「うむ。くれぐれも注意してくれ。」

「…………はい。」

争いのない楽園に見える国で不穏な空気が漂い始めていた。

皇帝の心の中に魔が棲んでいるという。

現実ならば、大変なことだつた。

だが、日に日にハインリヒ（コロウス^{23世}）はセドリクを遠ざけるようになった。

父親に愛されたいセドリクにとっては心が休まらない日々が続いた。何がおかしいということではない。

王妃テレーゼはリーザ（セドリク）を心配そうに見つめ、度々ハインリヒにもつと優しくと進言したが、妻も夫の尋常ならざる異変に気付いていた。

だが、テレーゼは愛するリーザに優しくするだけで、現状はこれといつて改善されなかつた。

「お母さま……あなたに愛されておきながら、父親の愛が欲しい等、わたしは贅沢ですか？」

ある日、耐え兼ねてセドリクがテレーゼに尋ねた。

「あなたは男の子として育てたし、父親に理想を求めるのは自然なことよ。リーザ……あなたには女の子としての名前もつけたけど、本当はどうぢりがいいの？」

「…………わたしは王子です。王女だと思つたことはあります。」

「…………拗ねないで。」

「すみません。意に沿わぬ子供で。そんなわたしではお父さまのお役に立てませんね。」

「…………リーザ……」

「お母さまはわたしに何をお求めですか？」

「王子らしく？」

「私は女の子のあなたが心配なのよ。本当ならばすぐ国外で平和に暮らせると思っていたわ。」

「わたしには守護すべき民がいます。祖国を見捨てたりはしません。騎士として、それが誇りです。」

「…………」

「わたしの命の心配をされていたのですね。心よりも。」

「拗ねたセドリクにテレーゼは反論できなかつた。

そんな渴いたセドリクの心を慰めるのは、幼なじみのレオンだった。ふたりは毎日よく遊んだ。

子供の頃からずっと。

彼は15歳になつたセドリクにある田ドレスを贈つたことがあつて、セドリクを驚かせた。

「君は女の子だよ。母上も君を女の子だと思っている。これを渡すよ。に頼まれたから今日はここに来たよ。」

優しく微笑んでレオンが言つ。

「僕は男の子の方が良かつたよ。」

父親のことが脳裏をかすめたのか落胆したセドリクにレオンが続けて言つ。

「君が困つた時は僕は飛んでついて助けてあげるよ。今までもこれ

からもずっと。」

「ふうん……別に君の助けなんていらないけどね、ありがとうございます。」「どういたしまして」

レオンはにこにこしていた。

ステイブルストン中尉が軍港から学徒動員された士官候補生と共に海軍の新型潜水艦に乗り込んで1日が過ぎた。

「まもなくフイールドバリア区域にさしかかる」

ブリッジで艦長がステイブルストン中尉に説明した。

「海中なら航行可能とうかがいましたが大丈夫のようですね」

「そのようだ。」

ステイブルストン中尉、準備は万端だな？

中尉達はカッターで上陸してもらつ

初めて航行する海域に冷や汗まじりに艦長が語りかけた。

「ハツ、いつでも上陸できます大佐」

部下が通信ブイを巻き上げると、上陸作戦を開始した。

ゆるやかで静かな海岸線を見つけると小型の上陸艇で砂浜にあがつた。

人数にして僅か12名。

ローゼルツ海軍の監視の目を盗んで砂浜を走つて行つた。

明くる朝、フィロソフィアと同じ影大洋の軍事国家アルメリアの軍隊が上陸したのを知つたのは、彼らが月明かりの絨毯の森と呼ばれるスズランの咲く森を進軍していた時だった。彼らは森の中で放置されていた古い城を要塞がわりにしている最中だった。

古城に案内されるとアルメリアの女性士官の居るテントに案内された。

「私はアリシア・デ・コルトですねん。階級は少佐。坊やの名前は？かたくならんでも私はあんたらを食つたりはしやんで？」
赤い巻き髪の女性士官は軽やかに言った。

「ステイブルストン中尉です。

名前はハーディン・イグレット・ステイブルストンです。」

「ほう……東方系とのミックスぽいね。よろしく。」「

デ・コルト少佐の気さくな態度に士官候補生達の表情も緩んだ。
しかしほうん……ステイブルストン中尉の表情は堅いままだ。

「ふうん……軍部の事情でも知っているみたいやね。」「

アリシアが探りをいれる。

「自分は今回の任務前には国王陛下の救出作戦に加わっていました。
陛下を拉致したあなた方の軍隊を許す気はありません。

たとえ、今は共同戦線をはつていても知つても簡単には許せません
よ。」

「たしかにあんたらの議会を脅してはいる。」「

「この森は深いし広大や、あんたらが迷わんとも限らへん。
ここでの言語もはつきりせえへんし……このまま子供だけで行かせるのは
は気がかりや。」

「ハーディン先輩……せっかくの好意ですから受け取っておきましょ
うよ~」

士官候補生の1人が情けない声を出した。

「しかしだな……陛下は彼女らの軍の支配下にあるし、彼女らの目
的もはつきりしない。簡単に従えるか~」

ステイブルストン中尉は拳を震わせた。

「忠誠心篤いんやね。うらやましいわ。」

でも、偵察任務つて情報をこっちは握つとるんやけどな~。」「

「……議会も我が軍部も屈したのですか?」

「そのようやね。おまけに、上はこの国も制圧しておかんと氣がす
まんらしげで。」

そのための任務やつたんちやう?」

「…………あなた方は戦争をしにこの国へ?」

「さうや。もう戦争は水面下で始まつとるんやで。」

兵器の質は圧倒的にうちらの方が優位やからこの国が降伏するのも

時間の問題なんやとちやう?

実際うちらは空軍の爆撃を待つくらいやよ。

やからうちらが何とかしてフィールドバリアを解除せんとね「

「フィロソフィア軍上層部が本当に、アルメリア軍と遠征を?」

士官候補生の1人ハワード伯爵アーサーが尋ねた。

「フィロソフィア王国の軍だけやあらへん。フィロソフィアの属領やつたフェアデイール連邦軍もや。上は密約を交わしとるんやで。」

「馬鹿な……」

アーサーは頭を抱えた。

「あんたらが、この森で迷つとる間に情勢はいろいろ変わつると
ゆう事をまず知つておいた方がいいね」

「……もしかして、あらかじめ分かつていて上はハーディン・ステ
イブル斯顿先輩をこの国へ行くように手配させていたんじゃない
ですか?」

マリン・スナイパーの役をしていたヘンリ・ジュン・ハワードが訝
しんだ。

「確かに私達3人は国王陛下ゆかりの者だが……」

顎に指をあてて考へ込むハワード伯爵に異母弟のヘンリが
「オレは違うぞ兄貴」

と、付け加えた。

「じゃあ、あんたら、これからどうするつもりなん?」

本国からの命令を待つわけやろ?

でも、どのみちやることは一緒やと思うんやけどなあ……」

アリシアは困つた様子で少年たち学徒を見ていた。

その時、フィロソフィア軍から司令書が届いた。伝令将校は丁寧に
アルメリア軍人に敬礼した。

中尉は頭が痛くなつた。

おまけにフィロソフィア軍が到着するまでアリシアさんに同行せよ
という内容だつたからだ。

「ただ、この国の言葉が分からないのがネックですよね、先輩」

「それが何とかなるかもしれん」

「何とかなるんならええんやけど～何かええテでもあるん?」

「……自分はこの国の言葉……聞き覚えがあるのですよ。」

「多分、自分が無くした記憶だと想います」

「記憶喪失だつたんすか先輩！」

「……子供の頃、浜辺で陛下に拾われる前の記憶がないだけで、日常生活に問題はないからな」

「でもビックリしますよ」

「ほんまかいな……あんたらほんまに大丈夫?」

「大丈夫、通訳くらいなら出来ますよ」

中尉はしつかりした口調で言った。

「ならええんやけどお」

張り切つて国を出てきたのに現実は厳しいとステイブルストン中尉は想つた。

一刻も早く育ての親の救出作戦に復帰したいのに、新しく戦争を始める準備を進めなくてはいけないとは……。

そんなこんなであつといつ間に一日は過ぎていき、彼らはアリシアが占領している古城に泊まることになった。

異変に気付いたこの古城の主であるディートリッヒ神父（ラインの弟）が父王ジークフリート25世に早馬を飛ばしたのは、これより2日後であった。

ディート神父とテンブル騎士は勇敢に戦つたが、

近代兵器の前に、特に機銃掃射の前に馬を狙い撃たれて敗走せざるを得なかつた。

ジークフリート25世とラインハルト王子はただちに軍を編成して霧深い森に足を踏み入れた。

「賊め……ディートが庭の手入れに戻らなければ気がつかないとこりだつたわ」

ジークフリート25世が不安げに次男ラインハルトに話しかけた。

「心配しなくともオレがいれば大丈夫だ父上。

オレの神聖魔導を占領軍に見せてやる」「それは頼もしいが、封印された古代兵器を手にしていたと聞くぞ。

それに私はお前に皇帝の元へ一刻も早く向かつてほしいのだが」

「…父上の身に万一件があるたら叔母上が悲しむからだ。テレーゼ叔母上が皇后だというのにまったく父上は…」

「セドリクは心配ではないのか？

お前のことだ、あの城が狙われる前に、妹の子であるセドリクが狙われんとも限らん」

「セドリクも神聖魔導を使う騎士だ。

賊を追い払つてからでも遅くはない！」

アルメリア軍と交戦するトラインはまず風を制した。

不思議な風で弾丸が発射されてもバラバラと落ちてしまつ。しかしそれにも限度があつて、兵士全員を底いきれない。陣形を辛うじて保てる程度だつた。

籠城する敵に決定打を浴びせられない。

しかも砲弾の雨を防ぎきれず、善戦するものの大局を制することが出来なかつた。

「こちらも封印された兵器を再開発せねばなるまいな…

もうよかろう。お前は皇帝のもとへ行つてハインリヒに兵器の封印を一時的に解くように言つてくれ」

「ちつ！ オレ一人なら何とかなるのだが… 父上、無事でいてくれ。お前たちは父上の周りを術で固めろ」

配下の兵に指示をとばすと馬を帝都ローゼンに向けた。

前線の混乱に乗じて反乱が起きたのはその頃だつた。

反乱軍は民間人を盾にセドリクを捕まると皇太子の座を退くよう要求した。

セドリクは要求はそれだけですか？

と言つと、あつさり応じる構えを見せた。

近衛士官のレオンがそれは出来ないと言つたのだが、

わたしの務めは市民を護ることだ。

無論、次の皇太子を決めるのは皇帝陛下「」自身であつて彼らではないと毅然として言った。

それを聞いた天帝カリクトウスが激怒して、皇帝ゴリウスに軍を出すよう迫った。

「あれははじめから皇太子にするつもりなど私にはなかつた。義父上が皇太子にしたようなものではなかつたか？」

ユリウス23世ハインリヒが冷淡に言うと教皇カリクトウスはますます怒り出して自らの私兵を送り出すと共に

近隣の諸侯、特にノルトラントやルーヴ、イル、フォーデルウ、アイデの各選帝侯に軍の派遣を命じた。

彼らが救出の軍を編成していると、解放されたが怪我をしているセドリクが戻ってきたので、カリクトウスは怒りに任せて大馬鹿者と罵倒した。

セドリクはかえつて落ち着いていて、

畏れながら市民を守護するのが第一の使命でござります。無用な争いはどうかおやめくださいと進言した。

北エーデルラントの王太子ラインが帝都ローゼンにやつてきたのはそのような微妙な情勢下であった。

セドリク！お前らしいとラインが腹を抱えて笑うので、ますます頭に血がのぼった祖父カリクトウスはラインを錫で殴つた。ラインがこんなことをしている場合ではないと我に返ると選帝侯や天帝、皇帝の居る前で封印兵器の一時解除を提案した父王の親書を渡した。

甥のラインからゴリウス23世ハインリヒのもとに親書が手渡されると、

事態を重くみた皇帝は条件付きで承諾した。

そういう経緯で古代兵器群の氷山の一角が日の出を見ることになつたのだが、開発期間が短く、また間に合わなかつた。

全軍に配備するよりも早く竜騎士団を誇るノルトラントの王は和平

調印に出向いた所を暗殺され、また帝都ローゼンはノルトランツの制圧によって制空権を失い包囲された。

エーデルラントの言語が分かる者として、ステイブルストン中尉が最後通牒に現れた。

「ステイブルストン中尉と申します、皇帝陛下」

「敵ながら天晴れといったところか…」

ハインリヒにいつもの霸気はない。

「フィロソフィア、フェアティール、アルメリアの空軍が帝都を包囲しています。

降伏いただけない場合は帝都を絨毯爆撃します。

陛下、どうか無用な流血は回避していただきたい」

ステイブルストン中尉が叔父に話しかけると、ハインリヒは悟ったかのように片手をあげて玉座から段をおりてきた。

「いつかこのような日が来ると想つていたよハーディン」「は？」

突然名前を呼ばれてステイブルストン中尉が困惑した。

「いつたいどこの賊と思えば甥の軍だつたとは…」

誘拐されててつきり死んでいたものと想つていたが、よく帰ってきたな。」

「はい？」

「どうした？』

「聞けば、弟のディートリッヒ神父を負かせたらしいな

てつきり賊かと思えば、北エーデルラントの正当な王位継承者ではないか」

「王位継承者？」

「ふむ…恐怖で記憶をなくしたか？」

自分のおかれた立場をよく理解していないと見える」

「いえ、自分は、任務で参ったわけであります。皇帝陛下。」

「任務…か。良からう、いづれは君のものになるかもしけぬ国だ。統治するいい機会になるだろ？』

「統治するいい機会になるだろ？』

「つしてあつだけなく戦いは幕を閉じたかに見えたが、南エーデルラントの王で皇帝であつたハインリヒは、妻のテレーゼと養子のコリアン・フリードリヒをいち早く国外に逃すべく古代兵器ヘリコプターに乗せたばかりだったので、どこか安堵していた。

帝国は占領軍によつて瓦解するかもしれないが、いづれ復権出来る日も来るだらう と。

もつとも帝国内外の反乱軍によつてヘリコプターが撃墜されたのを知つたのは占領軍に後事を委ねた後であつたが……。

レオンに連れられてセドリクが城の地下水道を歩いていたのはハインリヒがステイブルストン中尉と話していた頃だつた。

「……まさか僕が逃げ出すことになるとはね。覚えていろよレオン。」

「解放軍を組織して戻つて来るまでの辛抱だよリーザ。

君は怪我人だから、当分は無茶させないけどね」

レオンと一緒になので、どこか空氣は明るい。

「やるべきことはたくさんあるな。まあ、お前とななら出来そうな気がするよ。」

地下水道から、月明かりの絨毯の森に出る。

「月明かりでスズランが綺麗だねリーザ。」

「綺麗だけど、きな臭くないか?」

「そういえば……」

「遠くで爆発した……」

警戒しながら爆発地点に向かつと帝室の紋章が施されたヘリコプターが墜落して炎上していた。

「みんな死んでる……」

「お母さま!」

「えつ?...」

レオンが振り向くとセドリクが声を上げて泣いていた。

スズランの……聖母の涙の花だけが月明かりの向こうを悲しく照らし

ていた。

セドリクは埋葬するとき、母から貰つたイヤリングの片方を外して母テレーゼの耳につけてあげた。

天国への階段と呼ばれるスズランの花束と一緒に。

「きっと祖国を守つて死んだんだ…」

レオンはそんなセドリクを慰めた。

* 第1部第2章*

レオンは疲れきった様子のセドリクを船に乗せると、横にならせた。
「お母さまの為に今まで頑張つてこれたのに…」

セドリクの疲れが激しいからだ。

「君は怪我人なんだからね。ユリアンのことも考えるのは今はやめよつ…どうしようもなかつたんだ…」

「…………うん…………」

セドリクは力ない。

レオンは海を越えてローバーン王国につくと、まずセドリクに普通の生活をさせるように心がけた。

解放軍の結成は無理かもしれないと思いながらも胸中はセドリクだけでも無事で良かつたと考えていた。

セドリクの具合がすっかり良くなつて、生活費が足りなくなつてくると、セドリクは近くの学校で働きだした。

その頃になると、この国もフィロソフィアの軍に対抗できなくなりつつあり、

ローバーンの王子に加勢するべく、ローゼルツ帝国の北方最大の領邦国家のひとつであつたノルトラント王国の王子アンセイス・アンセルムス・ファレンティーンが当地で解放軍を組織した。

竜騎士の彼は竜騎士団を再編成してフィロソフィア軍に対抗した。

優秀なドワーフンはその羽で数々の攻撃を無効化して一定の戦果をあげていた。

「アンスが来ているのね」

すっかり女口調になれた感じのセドリクが休日のお茶の時間に新聞を見せて言った。

「行つてみるかい？ リーザ」

「…………悪くないけど、この普通の暮らしまずてがたいわ。

なんてね。冗談よ。

アンスが頑張っているのなら、さりげなく応援に行つてあげるのが親友のつとめよ」

「そういうと想つたよ。でも今度こそ君は無理しちゃダメだよ。王様も無茶は望んでいないからね。」 雪の降る中2人は皆に向かった。

「よつ！」

お前ら生きてたのか。悪運強えな！ リストからもれて行方不明だつたからずっと探していたんだぜ？」

アンス王子が笑つて出迎えた。

「ここにはノルトラントの軍人が多いから、ヒーデルラントの宮廷にいたような時のギチギチした空気はないぜ。安心して過ごせよな。武器は…持つているみたいだな。

聖遺物を一つも持ち出すなんてしつかりしているよな！」

セドリクの持つ聖なる大剣ロザリオ・ディレクタフロンと、レオンの持つ聖剣オーカーを確認するとアンスが笑つた。

「そうそうアルベルもいるんだぜ？」

アンスがアルベルの部屋に案内する。

アルベルはオルガンを弾く手を止めると「良かつた…よくぞ」無事で！」

とセドリクの無事を泣いて喜んだ。

「アルベルは泣き虫ですね」

セドリクがからかうとアルベルは、これは喜んでいるんですけどムキ

になつて反論した。

それはそうだ。アルベルにとつてセドリクは最愛のひとなのだから。アンスは従弟のアルベルの心の内を思い出した。

この知らせは瞬く間に国王夫妻と王子達の耳にはいることになり、セドリクと従兄のレオンハルト王子の無事を心から喜んだ。

ローバーン王国の南にあるサミニティア王国の王ラルスはこの知らせを聞くと直ちにセドリクに援軍を送ることを決めた。

サミニティア王室とローゼルツ帝室と南エーデルラント王室は先祖を同じくしていく、現在も親交が深かつたのだ。

（訳注：小説版と漫画版の第1部第1章終了間際でセドリクはレオンがハーディングの追つ手から庇つた際に生き別れており、レオンはエーデルラント地方にどまつていた。

この為、第1部第2章冒頭では放心状態のセドリクと記憶喪失のハーディングが細かく描かれたのだが当作品では省いている。

この作品を500ページに編集出来るか疑わしいので、当作品はハイライト版の性格が強い。）

解放軍の志氣があがつていた頃、ステイブルストン大尉は帝都ローゼンの執務室に自身の弟だといつライ昂ハルト王子を招いていた。

「検査の結果が出た」

「そうか…」

「間違いなくあんたはオレの兄だ。遺伝子情報が兄のものと同じだつたそうだ。」

「にわかに君が弟だとも信じられないがな…」

「従妹のセドリクは覚えていないのか？」

「小さい頃兄上がいつも面倒をみていた」

「セドリクの名前は聞き覚えがあるが……すまないな…そこまで記憶は回復していない。」

「まあ、焦ることなんてないよな」

腰に手をあてて喋つていたラインが腕を組んで笑うと机の上の書類を見た。ラインが笑うのは珍しいのだが、

それも覚えていないハーディンは当たり障りのない範囲で説明した。

「元老院を再編して議会を作らないといけないんだ。

この国は今まで専制政治だったのによく今まで統治してこれたな。

驚異にあたいまする」

「古い議会政治はセドリクが興味を持っていたな。

あいつはオレと違つて政治家になるつもりだったみたいだから

「…セドリク王子と従兄のレオン王子が生きていたそうだ」ステイ
ブルストン大尉がラインにそう告げた。

「2人が陥落のどさくさに紛れて逃げたのは知つている。

セドリクは怪我をしていたが元気になつたみたいだな。」

「解放軍を組織していると言うことは?」

「そこまでは知らない。アンス達と合流したか。」

「私は近いうちにローバーンに行くことが決まつているが、君はどうするつもりだね?」

君さえよければ一緒に来てくれて構わないそつだ。
医師は不足しているから…」

「たしかにここにいてもろくなことは無いだろ?な。
退屈しているから、ついていってやつてもいい」

「セドリク王子に会えることもあるだろ?」

無論、君が解放軍に荷担しないのが前提だがね。
ハイインリヒさんも来るそうだ。」

「叔父上も?」

「向こうで会談を予定しているから、それで来られるそつだ。」

「会談をしにローバーンへ?」

「実はセドリク王子が先日の我が軍との交戦中に王室の血をひくバ
ールバラの伯爵アーサー・ケネス・ハワードを怪我させたそつだ。
彼は私の部下でね。落馬した際に頭を強く打つて意識がない。

王室の方もお越しあそばせる」

「…会談には興味がないが…オレにいつたい何をしろと?」

「伯爵を診てほしい。伯爵が回復したら両王家も和解できるだろ?」

「仕方がない。セドリクも余計な仕事を寄越すものだ……。」

「ラインはしぶしぶ了承した。

「では至急荷物を纏めてくれ。早速ローバーンのアーサー・ハワード伯爵のもとに飛んでもらう」

ホーエンツォザー家の兄弟は空路ローバーンへ向かうとハイデルベルク城へ急行した。

ここが会談の舞台に選ばれたからだ。

今回の会談ではちゃんとエーデルラントの富宰も招かれていて、占領計画が順調なのを影大洋三国の高官たちがアピールする目的もあつた。

会談というよりは各国首脳の密談に近かつたのだが、一定の和平交渉が行われた。

アンス・ファレンティーン王子達の解放軍とフィロソフィア軍が特に制空権をめぐって熾烈な戦闘を繰り返していたのだが、

和平交渉の為、一時休戦となつた。

和平案はかねてから検討に検討を重ねて周到に準備されていたのだが、フィロソフィア王の孫アーサー・ハワード伯爵がセドリクとの一騎打ちで意識不明の重傷に陥つたことにより予定より早められることになつた。

ハワード伯爵の異母弟ヘンリイは異母兄の仇を討とうとしていたので、セドリクと話すことなど何もないといまいましく言ひはなつと、和平交渉よりも寧ろセドリク王子暗殺計画の方に共鳴していた。その為、和平交渉にはハワード家のバールバラ伯爵アーサーの母マティルダ王女が赴くことになつた。

豪雪地方のハイデルベルク、一月の寒い日に各国首脳は一同にかいした。

「前の和平交渉では父ちゃんがが暗殺されたんだが、
今回はまともに行えそうだな」

アンスが机の上でペンを回していくとマティルダ王女が話しかけて来た。

「先代ノルトラント大公のお悔やみを申し上げます。

ファレンティーン王子には、」迷惑をおかけしましたね」

「戦争の虚しさを痛感しただけだ。謝つてもうつて父が帰つてくる

わけではない」

そう返答するに留めた。

「あれは事故だと聞く」

アルメリアの大臣が重い口をひらいた。

「…それについて論議をしにきたわけではあるまい」

皇帝の座を追われたハインリヒが両者を窘めた。

「色んな者が死んだ。

ハインリヒの妻と三男も殺された。

王侯貴族から本来殺戮の対象外であるべき非戦闘員までな…」

サミニティア王ラルスの口調も重い。

「わらわの息子もいまだ昏睡から覚めぬ…。

これ以上の犠牲者を出さぬ為にみな参ったのです！」

マティルダ王女はそう発言すると場は静肅になつた。

マティルダ王女は盲目と聞く。月夜の姫と呼ばれた女性だ。そういうつた囁きが交わされた。

「ノルトラントは今、どうなつているんだ？」

アンス・ファレンティーンがマティルダに尋ねた。

「かの地は先代大公グスタフ殿が治められています」

「そうか」

じーちゃんが、とアンスは心の中で付け加えた。

「本日は伯爵の異母弟君が来るとうかがつていたのですが…いかがなさいましたか？」

渦中のセドリクが礼儀を重んじながらフィロソフィアの武官に尋ねた。

「セドリク、彼は来ない」

武官のひとり、ハーディン・ステイブルストン大尉がスマートに返答した。

「そうですか…教えてくれて感謝します」

「ヘンリ・ジュン・ハワードには気をつけなさい。セドリク王子。彼はあなたを恨んでいます」

「心にとめておきます」

ところで、ヒローバーン王が切り出した。

何故休戦の申し入れを？

「そもそも我が国はアルメリアの支配下にあり、これ以上、王家から犠牲者を出さないためです」

マティルダ王女は難しい表情で説明した。

「確かに無益な戦が多くつたが、ずいぶんと弱腰ではないか王女よ」

「国王陛下は戦を好みません。今回の事に頭を悩ませておいでです。私はせめて、娘としてのつとめを果たしたいのです」

「そうであったか…」

会談は平行線を辿ったが、マティルダはこの話とは別に内密にだがエーデルラントの返還問題に言及した。

時期が来たらハインリヒに国を返すと言つのだ。

そのかわり、フィロソフィアとフェアティールには攻め込まないでほしいと告げた。

「あの戦いはなんだつたんだ。クソッ！」

アンスの怒りはやり場がなかつた。

「わたしだつて！」

怒りの矛先にあつたセドリクが本音を言つた。

伯爵アーサーをフィロソフィア軍に引き渡すと、ラインは神聖魔法で回復するかどうか試みた。

効果は数ヶ月してからあらわれて、アーサーは目を覚ました。

ヘンリはラインに礼を言つとアーサーの回復を心から喜んだ。

そうして月日は流れ春になつたころ、ステイブルストン少佐の加わる国王救出作戦はようやく成功し、

やがて彼らは国に帰ることになった。

解放軍がエーデルラントに凱旋帰国した時、ノルトラントの鉄拳大

公ゲスタフはセドリクとレオン、ハインリヒに真実を告げた。

真実を告げる前に帰つて来てくれて良かつたと言つたが、セドリクとレオンはショックを受けた。

レオンはセドリクに淡い恋心を抱いていたと言つと、セドリクは馬鹿だなと言つて諦めた。

レオンはしばらく空気が抜けたようになつていて、いつしかセドリクの姿が見えないので、あちこち探した。

エーデルラントの遅い春、春の女神オスター・ラの花スズランが、月明かりの絨毯の森に咲く頃……。

ステイブルストン少佐の帰国の際に、ハーディン・ステイブルストン少佐にセドリクはひとつこう告げた。

「ついてく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6003z/>

EIN GLANZ

2011年12月21日22時52分発行